

スコットランドはなぜ王制に拘ったのか

—— 中世スコットランドの窓から(3) ——

Why have the Scottish Peoples Sticked to Sovereign Powers?

—— Out of Windows in medieval Scotland (3) ——

久保田 義 弘

要 旨

本稿の第1節では、スコットランドにおいて、国王が長期間にわたって王国を不在にしたときでさえ、王制が維持された経緯を幾つかの事例を取り上げて考察する。その事例として、デイヴィッド2世が、フランスに彼の王妃と共に7（あるいは8）年間亡命したとき、あるいは11年間イングランド王国で人質としてロンドン塔に軟禁されるとき、スコットランドでは摂政役を置き王制が維持された。ジェイムズ1世が18年間人質としてロンドン塔に抑留されたときにも、摂政役を置きスコットランドでは王制が維持された。また、メアリー女王が、フランス宮廷で教育を受けていた期間とフランソワ2世の王妃であった期間を合わせた12年間にわたってスコットランドを不在にしたときにも、スコットランドでは摂政役を置き王制が維持された。そして、その子ジェイムズにスコットランド国王を譲ったメアリー女王がイングランド王を狙った事例を概観する。第2節では、スコットランドのイングランド王に対する抵抗運動から第1次独立戦争の間、スコットランドでは王制が維持された事例からスコットランドの王制への拘りを概観する。アサル王家の嬰兒マーガレット女王の死後、イングランド王の宗主権やその占領からスコットランドを解放する抵抗運動あるいは第1次独立戦争の間（1290年から1306年の間）、国王が不在であったが、治める領土はなかったロバート・ブルースがロバート1世として戴冠し、1306年に王制が復活した。1328年のエディンバラ・ノーザンプトン条約によってイングランド王に対してスコットランド王権を回復させ、完全に独立した。一旦完全な独立を遂げたスコットランド王国であったが、再度、イングランド王エドワード3世による直接統治の恐怖に直面した。彼は、エドワード・ベイリヤル王を傀儡王にし、その宗主権を握った。この宗主権から独立するための第2次独立戦が展開されたが、その間も王制は維持された。この節の後半では、スコットランド王ジェイムズ4世の人材登用、ハイランド統治、時代を見る先見性、さらに文化政策を概観し、スコットランド王権の伸張を確認する。その後、ジェイムズ5世とメアリー女王は、イングランドおよびフラ

ンスの覇権争いの渦の中で、両国に翻弄されながら、スコットランド王国の維持に務めた。その苦悩の一端を概観する。ジェームズ 6 世のスコットランドおよびイングランド王国の王位に就任することで、スコットランド王権の役割は終えた。

第 3 節では、同君連合王国における王制が維持された事例を見ると同時に、ステュワート王家に拘ったジャコバイト運動(1715 年と 1745 年における同君連合王国の国王ジェームズ 2 世の血筋を国王に迎えようとする運動)について概観し、スコットランドの王権への拘りの側面を見る。スコットランドおよびイングランドの同君連合王国では、「無血革命」の後、ステュワート王家の直系の血筋が絶えたために、またプロテスタント思想をもつ王を王位に就けることをもねらって、イングランドとスコットランドの議会を統合した「連合法(合同法)」(1707年)が成立した。しかし、ステュワート王家に拘るスコットランド人、特にハイランド地方の部族(氏族)は、ハノーヴァー王家を廃しイングランド王およびスコットランド王であったジェームズ 2 世の血筋によるステュワート王家の再興に拘った政治的軍事的運動をおこした。この観点からスコットランド人の王制に対する関心やその関わりについて探る。(キーワード：王制と摂政、スコットランドの第 1 次独立戦争、ジェームズ 4 世と王権の伸張、メアリー女王、1707 年の連合法(合同法)、ジャコバイト運動)

はじめに

本稿では、なぜスコットランドは王制に拘ったのかについて考察する。歴史的な事例によって、スコットランド人の王制への拘りの事実を提示する。

第 1 節において、スコットランドでは、国王が長期にその王国を不在にしたときでさえも、王制が維持された事例を取り上げ、王制が維持された経緯を考察する。第 1 項では、デイヴィッド 2 世(David II)(在位 1329 年-1332 年, 1346 年-1371 年)が、フランスに彼の王妃と共に 7 から 8 年間亡命したとき、あるいは 11 年間に亘ってイングランドで人質としてロンドン塔に軟禁されスコットランドを不在にしたとき、スコットランドでは摂政役を置き、王制が維持された事例を最初に取りあげる。第 2 項では、ジェームズ 1 世(James I)(在位 1406 年-1437 年)が、18 年間人質としてロンドン塔に抑留されたときもスコットランドでは摂政役を置き、王制が維持された事例を取りあげる。第 3 項では、メアリー女王(Mary Queen)(在位 1542 年-1567 年)が、フランス宮廷で教育を受けていた期間とフランソワ 2 世(François II)(在位 1559 年-1560 年)の王妃であった期間を合わせた 12 年間、女王はスコットランドを不在にした。スコットランドでは、この間も摂政役を置き、王政が維持された事例を概観する。そしてフランス王妃になり、ジェームズに王位を譲り、イングランドに逃れ、イングランド王を狙ったメアリー女王の生涯を概観するが、メアリー女王は、国王としての判断力と威厳の

全く感じられない人物であったことが知られる。メアリー女王は、イングランド王の位を血筋故に望んだ。その顛末は、彼女の断頭刑による処刑であった。

彼女は、生後6日にして王位を継承し、5歳でフランスに渡り、フランス宮廷で教育を受け、16歳でフランソワ2世の王妃になり、その2年後にフランス王フランソワの死によってスコットランドへの帰国を余儀なくされた。その間、王母が摂政役としてスコットランドの国務を仕切っていた。スコットランドは何故に王制に拘ったのであろうか。

彼女には国王としての才覚が無かったために、彼女は統率力のある男性を婿に迎えようとするが、最初の結婚相手(護国卿)は、ダーンリー卿ヘンリー・ステュワート(Henry Stewart, Lord Darnley) (1545年生-1567年没)であった。第2の結婚相手(護国卿)は、貴族のボスウェル伯ジェイムズ・ヘバーン(James Hepburn, 4th Earl of Bothwell) (1535年生-1578年没)であった。彼は、メアリー女王に気に入られ、側近第一号として扱われた。メアリー女王は、ダーンリー卿の殺害首謀者と思われる寵臣ボスウェル伯を処罰するどころか、彼に領地を増加したのであった。ボスウェル伯は、メアリー女王を拉致し、ダンパー城に連れて行き、レイプし結婚を迫った。結局、2人は1567年5月にプロテスタント宗旨に従って、ホリールドハウス宮殿で結婚式を挙行した。カソリックのメアリーがプロテスタントの夫の宗旨に従って挙式をあげた。メアリー女王は王としての才覚がないにも拘わらず、王の位に拘った。

第2節では、スコットランドのイングランドに対する抵抗運動からその独立戦争に及ぶ間において王制が維持された事例を取りあげる。その第1項と第2項では、マーガレット女王の死後、1290年から1306年の期間、イングランド王の宗主権あるいはその占領からスコットランドを解放する抵抗運動あるいは第1次独立戦争が繰り返され、イングランド王に対してスコットランド王権を回復させた。その間、国王が不在であったが、治める領土もないにもかかわらずロバート・ブルース(Robert Bruce) (1274年生-1329年没)は、ロバート1世として戴冠して、1306年に王政を復活させた。その独立戦争を通じて、それ以前のアイルランドの伝統とともにあったスコットランド人とは異なった、今日のスコットランド人に繋がる国民性の創造が始まり、スコットランド人の国民性が形成された、と考えられる。第3項では、一旦完全な独立を遂げたスコットランド王国は、再度、イングランド王エドワード3世(Edward III) (在位1327年-1377年)による直接統治の恐怖に直面した。彼は、エドワード・ベイリヤル王(Edward Balliol) (在位1332年8月-1332年12月, 1333年-1346年)を傀儡王にし、その宗主権を握った。

第3節では、同君連合王国においての王制が維持された事例を探ると同時に、ステュワート王家に拘ったジャコバイト運動(1715年と1745年における同君連合王国の国王ジェイムズ2世の血筋を国王に迎えようとする運動)について概観し、スコットランドの王制に対する

拘りのある側面を概観する。スコットランドおよびイングランドの同君王国では、「無血革命」の後、イングランドとスコットランドの議会を統合した「連合法」（あるいは「合同法」）（1707年）が成立した。スコットランド人（特にハイランド地方の氏族）がイングランド・スコットランド王（同君）であったジェームズ2世の血筋（ステュワート王家）に拘った政治的および軍事的な運動（反乱）からスコットランド人の「グレートブリテン王国」あるいは王制に対する関わりを探る。

第1節 国王の不在と王制の維持

1.1 亡命あるいは国外抑留と王制維持

デイヴィッド2世 (David II) (在位 1329年-1332年, 1341年-1371年) は、2度、スコットランドを不在にしたが、スコットランドでは王制が維持された。デイヴィッド2世は、ジョアン王妃と共にフランスのシャトー・ガイヤールに亡命し、フランス王フィリップ6世 (Philippe VI) (在位 1328年-1350年) の保護を受け、そこで7 (あるいは8) 年間亡命生活を送り、成人し、1341年に帰国した。その間、スコットランドでは、国王が不在であったが、ブルース王家によって王制が維持された。その後も 1346年から 1357年まで、スコットランド国王はイングランドのロンドン塔に軟禁され、囚われの身となったが、この間もスコットランドでは、ブルース王家によって王制が保持された。

その間、スコットランドでは王国制¹を廃止することなく維持できたのは、第1に、国王の亡命中や囚われの身の間、ロバート・ステュワート (Robert Stewart, Earl of Strathearn) (1316年生-1390年没) やマリ伯トマス・ランダルフ (Thomas Randolph, Earl of Moray) (1332年没) やマー伯ドナルド・マー (Donald II/Domhnall II, Earl of Mar) (1302年生?-1332年没) が摂政役を努め、実質的に国政の舵取りを行ったこと、第2にイングランドとフランスの間では「百年戦争」(1338年-1450年頃)の真っ只中であつたので、イングランド王がスコットランドに侵攻する余裕が無かつたこと、第3に 1348年, 1349年, 1361年, 1368年の4回に亘ってイングランド王国にペスト²が蔓延したために、イングランドにはスコット

¹ ロバート1世 (Robert I) (在位 1306年-1329年) の後、王位はデイヴィッド2世に後継されたが、一方ではイングランド王エドワード3世 (Edward III) (在位 1327年-1377年) がエドワード・ベイリヤル (Edward Balliol) (在位 1332年8月-1332年12月, 1333年-1346年) をスコットランド国王として認めた。1333年から 1356年までの間には、スコットランドには2人の国王が在位していたが、しかし、その2人の国王は、その間の殆どの時間を外国(デイヴィッド2世はフランスとイングランド, エドワード・ベイリヤルはイングランド) で生活していた。2人の国王が不在の時には、マリ伯トマス・ランダルフやマー伯ドナルド・マーはデイヴィッド2世の摂政を努め、1333年以降はロバート・ステュワート (後のロバート2世 (Robert II) (在位 1371年-1390年)) が摂政を務めた。

² ペストは、イングランドの人口を激減させ、その激減は労働人口の減少と経済の破綻をもたらした。

ランドに攻め入る余裕が無かったことである。これらの理由によって、スコットランドには仮初めの平和が続いた。デイヴィッド2世が無為で怠惰な政治姿勢³を採ったにもかかわらず、スコットランドはその無能な国王を王位に就けたままにして、王制を保持した。

王が愚王であり、さらにその愚王デイヴィッド2世がスコットランドを不在にした時でさえ、摂政役を置きスコットランドは国制⁴を継続させた。なぜスコットランドは王制に拘ったのであろうか。決してブルース王家の愚王に拘る必要はなかったし、さらに王制に拘る必要はなかった。

1.2 国王の人質と王制維持

ステュワート王朝のロバート3世 (Robert III) (在位1390年-1406年) が他界し、その3男⁵ ジェイムズがジェイムズ1世 (James I) (在位1406年-1437年) として王位を継承した。このとき、ジェイムズ1世は、イングランドに人質として囚われの身であった。スコットランドでは、国王不在の時代⁶には、摂政役をおいて統治をおこなった。2代オルバニー公ロバート (Robert Stewart, 2nd Duke of Albany; ロバート3世の弟、ジェイムズ1世の叔父) がスコットランド議会によって摂政に指名された。ジェイムズ1世がイングランドに抑留されていた18年間⁷、2代オルバニー公ロバートとその子マードックが摂政となり、その王国の政

³ デイヴィッド2世は、ネイヴィルズ・クロス³の戦いでイングランドに囚われ、11年間捕虜とされた。しかし、1357年10月にベリクでイングランド王エドワード3世は、休戦条約を結び、10万マルクを10年間で返済することを約束にデイヴィッド2世の保釈を決めた。

⁴ 2人の国王が不在の間は、マリ伯トマス・ランダルフやマー伯ドナルド・マーがデイヴィッド2世の摂政になったが、エドワード3世との戦いの最中に、マリ伯は急死し、マー伯は戦死した(1332年)。1333年以降、ロバート・ステュワート (後にロバート2世になる) が摂政を務めた。

⁵ ロバート3世とサー・ジョン・ドゥラモンドの娘アナベラとの間には3男4女がいた。次男は早世し、長男デイヴィッドは、1398年にスコットランドで最初の爵位ロスシー公となったが、彼は、数々の不品行な行いをし、政務を蔑ろにし、統治力のない人物であった。彼は、その同棲者を虐待したことから、監禁された。その監禁先のロバート・オルバニー公の所領であるフォークランドの館で死亡した(1402年)。王位を継いだのは3男ジェイムズで、彼は8歳であった。

⁶ スコットランドでは、幼王マーガレットがノルウェイ王国にいながらにして王位にあった1286年から1290年、1296年にジョン・ベリヤル (John Balliol) (在位1292年-1296年) が廃位され、1306年にロバート1世が即位するまでの10年間、デイヴィッド2世が1334年から1341年にかけてフランスで逃亡生活をした7年あるいは8年の間、ならびに1346年から1356年にかけてイングランドに抑留されていた11年の間、そしてジェイムズ1世がイングランドで抑留された18年間のいずれのときにも、国王不在にもかかわらず王制が継続され、摂政職が政務を執り行った。

⁷ 1406年にジェイムズ1世が12歳の時、ロバート3世はジェイムズをフランス宮廷で教育させるためフランスに旅出させたが、その途中でイングランド側に捕らえられ、1406年から1424年までの18年間、イングランドで人質の身となった。ジェイムズ1世は、イングランドでは、最高級の人質として、音楽、作詩、スポーツなどあらゆる教養教育を受けた。初めロンドン塔内での王宮生活、後に中部ノッティンガム、グロスター北東のイーヴィンシャム、ヘンリー5世 (Henry V) (在位1413年-1422年) の時にはウィンザー

務を執り行った。18年間、国王の不在にも拘わらず、スコットランドではステュワート王家によって王制が維持された。実際には、有力貴族が国政を執っていた。その間に、王権は蔑ろにされ、王威が有力貴族や地方豪族に無視されたにも拘わらず、国内統治になぜ国王というシンボルが必要であったのであろうか。この王制維持の戦略が、スコットランドにおいて、それまで一貫して採択されてきた政治手法であった、と思われる。スコットランドでは、シンボルとしての王あるいは王威が統治には必要であったのであろう、と思われる。

1.3 フランス王妃になりイングランド王を狙ったメアリー女王

ジェームズ5世 (James V) (在位 1513年-1542年)の死後、直ちに、生後6日のメアリーが王位についた。メアリー女王 (Mary Queen) (在位 1542年-1567年)がスコットランド国王として即位⁸した。スコットランド王国は、アサル家 (House of Atholl)の最後の王マーガレット女王 (Margaret Queen)と同じように、嬰兒女王による船出となった。メアリー女王は、ステュワート朝の最初で最後の女王であった。メアリー女王が成長するまで、摂政役が必要であった。最初に、ジェームズ2世の曾孫で、プロテスタントで、親英派であった2代アラン伯ジェームズ・ハミルトン (James Hamilton, Duc de Châtellerauld, 2nd Earl of Arran) (1516年生?-1575年没)が摂政役に就いた⁹。

メアリーがスコットランド女王であったにも拘わらず、王母マリー・ドゥ・ロレーヌ (Mary de Lorraine)¹⁰ (1515年生-1560年没)は、彼女にフランス宮廷の教育を受けさせ、フランス

城に移り、ヘンリー5世に最高の軍事教育を受けた。イングランドの統治者(ヘンリー4世, ヘンリー5世)からの統治に関する知識が、帰国後のジェームズ1世の統治の原動力となった。

1424年2月2日にテムズ川南岸サザックで結婚式を挙げた。結婚相手は、サマーセット伯ジョン・ボーフォート (John Beaufort, Earl of Somerset) (1373年生?-1410年没)の娘ジョアンであった。ジョアンはヘンリー5世と従兄妹であった。サマーセット伯ジョン・ボーフォートは、エドワード3世の4男ランカスター公ジョン・オブ・ゴント (John of Gaunt, Duke of Lancaster) (1340年生-1399年没)と3番目の夫人キャサリン・スウィフォード (Catherine Swynford) (1350年生?-1403年没)との間の長子として生まれた。4男ランカスター公ジョン・オブ・ゴントと最初の夫人ブランシュとの間に生まれたのがヘンリー4世 (Henry IV) (在位 1399年-1413年)であった。よって、ジョアンはヘンリー5世と従兄妹になる。

⁸ メアリーの戴冠式は1543年9月9日に執り行われた。即位と戴冠が異なるのは、王母マリー・ドゥ・ロレーヌとアラン伯の間の確執があったことによる。王母マリー・ドゥ・ロレーヌと2代アラン伯の確執は、王女メアリーへのイングランドとフランスからの結婚の申し込みにも現れていた。

⁹ ハミルトンは、1542年から1554年まで摂政職にあった。その後、1554年から1560年までは王母マリー・ドゥ・ロレーヌが摂政役であった。その後はメアリー女王が親政を執った。

¹⁰ ジェームズ5世の最初の妃は、フランス王フランソワ1世 (François I) (在位 1515年-1547年)の娘マドレーヌ・ドゥ・ヴァロア (Marie de Valois) (1520年生-1537年没)であったが、彼女は、結婚後、半年で他界した。2番目の妃は、フランスのフランソワ1世の重臣の娘マリー・ドゥ・ロレーヌであった。マリー・ロレーヌの母方がブルボン家に繋がるバンドーム伯家であったので、ジェームズ5世の死後、

王妃にするために彼女をフランスに送り出すことを提案した¹¹。この提案は、イングランド王ヘンリー8世の帝国主義的なイデオロギーからスコットランドを護る方策でもあった。1548年7月フランスとの結婚条約がハディントン近くの女子修道院で調印され、5歳のメアリー女王はフランスに向かった。フランス国王アンリ2世 (Henri II) (在位 1547年-1559年) から送られたフランス艦隊は、1548年8月、5歳の少女メアリー女王、付き人4人、4人のメアリー¹²と共にダンバートン城からフランスに向かい、そこに無事に着くことができた。この渡仏の目的は、将来メアリー女王がフランスの皇太子フランソワと結婚することであった。彼女は、アンリ2世¹³の宮廷に温かく迎えられた¹⁴。1558年に15歳の女王メアリーは、1つ年下の皇太子フランソワとパリのノートルダム寺院で結婚式を挙げた。アンリ2世の不慮の事故死の後、皇太子フランソワがフランソワ2世 (François II) (在位 1559年-1560年) として即位し、メアリーは16歳でフランス王妃になった¹⁵。1560年12月にフランソワ2世が顔面の悪性の腫瘍から中耳炎を患い、16歳の若さで他界した後に、メアリー女王は、12から13年振りに母国スコットランドの土を踏んだ。スコットランドでは、既に、プロテスタント¹⁶が

スコットランドに影響力を持っていた。

- ¹¹ スコットランドは、ヘンリー8世 (Henry VIII) (在位 1509年-1547年) による執拗なフランスとスコットランドとの分断政策に悩まされる。ジェイムズ4世の時と同じように、彼は、一人息子のエドワード王子とメアリー女王の結婚を通じて、イングランドとスコットランドの一体化政策を推進し、1543年6月にグリニッジ条約でエドワード王とメアリーの結婚を約束した。しかし、枢密会議ではデイヴィッド・ビートン (David Beaton, Archbishop of Saint Andrews) (1494年生-1546年没) が実権を握ると、スコットランドはカソリックを選び、フランスとの同盟を優先させる政策を強め、反イングランドの姿勢を取った。王母マリー・ドゥ・ロレーヌはイングランド侵攻の危険を感じて、1543年9月に、メアリー女王をリンリスゴウ宮殿からスターリング城に移し、そこで戴冠した。このようにメアリー女王の戴冠が遅れたのは、イングランドとフランスの外交政策にスコットランドが振り回されたためである。
- ¹² メアリー女王と同じ年の4人のメアリーは、スコットランド貴族であるビートン、シートン、フレミング、リビングストンの貴族の娘であった。シートンは終生メアリー女王に仕え、女王の処刑にも立ち会った。
- ¹³ アンリ2世は、フランソワ1世と王妃クロード・ド・フランスの次男として生まれた。兄フランソワが急死したため、王太子 (ドーファン) の称号を得、1547年に王位に就いた。彼の妹マドレーヌ・ドゥ・ヴァロアはスコットランド王ジェイムズ5世の王妃となった。また、1559年6月30日、アンリ2世の妹マグリットとサヴォイア公、娘エリザベートとスペイン王フェリペ2世 (Felipe II) (在位 1556年-1598年、イングランド王の在位期間は1554年から1558年) の結婚祝宴の一環として、モンゴムリ伯との騎乗槍試合で目を突き抜かれる槍傷をうけた。その傷が原因で7月10日に40歳で急逝した。
- ¹⁴ メアリーは、フランス宮廷では、母方の祖母のギーズ公アントワネットに預けられ、散文、外国語、作詩、ダンス、乗馬、音楽、刺繍などの最高の教育を受けた。彼女は、スコットランドでは望むことのできない貴婦人によって教育された。
- ¹⁵ 1560年12月にフランソワ2世は、顔面の悪性の腫瘍から中耳炎を起し、16歳の若さで他界した。メアリーは、18歳で未亡人になった。2人の間には子供はいなく、彼の死は、メアリーを単なるスコットランド女王という地位に戻した。彼女は、1561年8月に、カレーを発って、エディンバラ北西のリースに上陸した。12から13年振りに故国の地を踏んだ。
- ¹⁶ このころスコットランドでは、ジョン・ノックス (John Knox) (1510年生-1572年没) が精力的に各地

幅を利かせ、親英派が多く、メアリー女王を歓呼の声で迎え入れる雰囲気にはなかった。

隣国イングランドでは、1558年11月にメアリー1世¹⁷ (Mary I) (在位1553年-1558年) が他界し、ヘンリー8世の2番目の王妃アン・ブーリン (Anne Boleyn) (1507年生? -1536年没) の娘であったエリザベス1世 (Elizabeth I) (在位1558年-1603年) が王位¹⁸ に就いた。この王位継承に対してアンリ2世は、庶子であるエリザベスがイングランド王位を継承することに疑義があるとして、息子フランソワの嫁メアリー¹⁹ に正当なイングランド王位継承権があるとした。これに対処するために、イングランド議会はエリザベスを嫡出子と議決した。スコットランドのメアリーは、一時的であるが、スコットランド女王、かつ、フランス王フランソワ2世の王妃でもあった。その時、同時に、彼女はイングランド王の王位継承を申し出ていた。これはアンリ2世の政治的戦略であった、と思われる。

メアリー女王には、国政統治の能力がなく、彼女を牽引する力のある護国卿（貴族）が必要であった。メアリー女王の統治能力の欠如が彼女を不幸にし、イングランド王権の継承に拘泥させたのかも知れない。メアリー女王は、牽引力のある護国卿（貴族）捜しでは、国王とは思われない軽率な行動を取り、そして結婚を決定した。彼女は、牽引力のある人物がそばに居て、初めて、国王としての能力を発揮できることを自覚していたので、王国を統治す

方で新教義の説教を繰り広げ、スターリング、リンリスゴウ、パース、セント・アンドリューズなどの中部スコットランドの各地で群衆が教会の破壊、聖像の打ち壊し、掠奪が横行し、暴動、内乱の様相を呈していた。また王母マリーが他界し、エディンバラ条約によって「古い盟約」は破棄同然になり、スコットランドはプロテスタントへの道を歩み始めていた。1560年12月には、議会はローマ法皇の権威を否定し、ラテン語によるミサを禁止した。

¹⁷ イングランド王メアリー1世は、熱烈なカソリック信奉者であり、法皇至上権の復活を唱え、イングランドは統一キリスト教に復帰した、と宣言した。彼女は、従兄弟のスペイン王カルロス1世の長男フェリッペを結婚相手に選んだ。彼女は、ブラッディー女王と呼ばれ、300人のプロテスタントを血祭りに上げた。1555年2月4日、ケンブリッジ大学ジョン・ロジャー (John Rogers) (1500年生-1555年没) を焚刑、同年2月9日、オックスフォード大学のジョン・フーパー (John Hooper) (1495あるいは1500年生? -1555年没) を焚刑、同年10月にロンドン司教ニコラス・リドゥリー (Nicholas Ridley) (1500年生-1555年没)、ウスター司教ヒュー・ラティマー (Hugh Latimer) (1487年生-1555年没) を焚刑、1556年にカンタベリー大司教トマス・克蘭マー (Thomas Cranmer) (1489年生-1556年没) を焚刑で処罰した。

¹⁸ メアリー1世とスペイン王フェリッペ2世 (イングランド王の在位期間は1554年から1558年) は、エリザベスが王位を継承することに同意した。もし反対し拒否すれば、スコットランド女王メアリーに王位が移り、フランス皇太子フランソワと結婚していたので、やがてフランス王妃になるメアリーがイングランド王位を継承すると、スペインとイングランドの同盟が喪失されることになり、スペインはフランス、イングランド、およびスコットランドを敵に回すことになる。エリザベスがイングランド王位を継承すると、スペインの孤立は回避された。

¹⁹ メアリー女王の祖母はマーガレット・テューダであり、マーガレットはヘンリー8世の妹であった。そのためメアリー女王にはテューダ王家の継承権があった。それに対し、エリザベスは、ヘンリー8世によって結婚無効が宣言されたアン・ブーリンの子であったため、後にイングランド王メアリー1世になるメアリーと同様に庶子と扱われていた。当時、庶子には王位継承権はなかった。

る能力のある相手を探した。最初の結婚相手は、1565年にダーンリー卿ヘンリー・ステュワート²⁰ (Henry Stuart, Lord Darnley) (1545年生-1567年没)であった。彼とメアリーは従弟の関係にあり、ダーンリー卿は、父系からも母系からもヘンリー・テューダ朝に繋がる人物であった。彼と知り合っただけの4か月の後に再婚し、またダーンリー卿がステュワート王家の先祖の後継者であったのかも知れないが、軽率にもローマ法皇の特許状²¹を受けずに結婚をした。このことから判断するに、その結婚は、統治者の結婚としては全く常識を欠く結婚であった²²。そのことは、結婚後半年も経ないうちにダーンリー卿との間が冷え込んだことから立証される。メアリー女王とダーンリー卿との結婚生活は、ダーンリー卿の横柄な態度や王資格による権力指向のために、うまくいかなかった、と想像される。結婚後半年も経ないうちに、ダーンリー卿との間が冷え込んだことは事実であろう。その証拠として、メアリー女王は、音楽家であり、彼女の私設秘書であったダヴィッド・リッチオ (David Riccio) (1533年生?-1566年没)を重用し、寵愛し、ダーンリー卿に約束した王位を引っ込めていた。しかし、嫉妬に駆られたダーンリー卿と貴族達は、ホリールード宮殿にいたリッチオを妊娠中のメアリー女王の面前で殺害した²³。その後、この殺害によって、メアリー女王とダーンリー卿の離婚は必然的であった。メアリー女王はダーンリー卿²⁴を避ける生活を送っていたが、取り巻きの貴族達は、スコットランド王国の統治のためには、ダーンリー卿を排除しなければならないと謀議していた。1566年6月にメアリー女王は、男子(この子が後にスコットランド王ジェイムズ6世、すなわちイングランド王ジェイムズ1世になる)を出産した。

第2の結婚相手は、メアリーのもとに足繁く通っていた貴族ボスウェル伯ジェイムズ・ヘバーン (James Hepburn, 4th Earl of Bothwell) (1535年生-1578年没)であった。彼は、メアリー女王に気に入られ、側近第1号として扱われた。メアリー女王は、ダーンリー卿の殺害首謀者であると思われていた寵臣ボスウェル伯を処罰するどころか、彼に領地を加増し

²⁰ ダンリー卿ヘンリー・ステュワートは、レノックス伯夫人マーガレットの息子であった。その夫人マーガレットは、メアリーの父ジェイムズ5世の異父妹であった。つまり祖母マーガレット・テューダと、祖父ジェイムズ4世の没後に再婚した6代伯アンガス伯アーチボルド・ダグラスとの間に生まれ、レノックス伯夫人となったマーガレットであったので、ダーンリー卿ヘンリー・ステュワートはメアリー女王と従兄弟であった。ダーンリー卿は、母系でヘンリー・テューダに繋がり、父系でステュワート王家に繋がる人物であった。そのために、イングランド王のエリザベス1世はメアリー女王とダーンリー卿の結婚には反対であった。

²¹ 当時、従弟どうしの結婚には、法皇の特許状が必要であった。

²² メアリー女王は、王族にしか与えられないロス伯、オルバニー公位をダーンリー卿に与えたばかりではなく、王位でさえ彼に与える約束をしていた。この王位に関する王女の処遇には、有力貴族の反発を買い、政治顧問のジェイムズは憤慨し、職を辞し、王女メアリーとダーンリー卿の敵に回った。

²³ 1566年3月9日にホリールードハウス宮殿で食事中に、ダーンリー卿の部屋に近い接見室の前でリッチオが殺害された。

たのであった。ボスウェル伯は、スターリングからエディンバラに戻るメアリー女王を拉致し、ダンバー城に連れて行き、レイプし結婚を迫った。初めメアリーは即答せずにいたが、2人は1567年5月にプロテスタント宗旨に従って、ホリールードハウス宮殿で結婚式を挙行した。カソリックのメアリーがプロテスタントの夫の宗旨に従って挙式をあげた。その結婚に反対する貴族は、スターリングに結集し、メアリー女王をボスウェルから救出する軍を起こし、2人はスコットランドの城から城へと転々と逃げ回る²⁵が、結局、メアリー女王は、1567年7月24日に彼女の王位を廃位させられた。王位は、その子のジェイムズ6世(在位1567年-1625年)に継がれた。

捕らわれていたメアリー女王は、1568年ロッチホルン城から脱出し、6,000人の兵を集め、軍をおこしたが、スターリングの北方ラングサイドでマリ伯軍に敗れ、イングランドに敗走した。エリザベス1世(Elizabeth I)(在位1558年-1603年)²⁶は、メアリーを保護し、彼女を幽閉するでもなく自由にさせるでもなかったが²⁷、その間、メアリーは、イングランド王位に正当な継承権があることを主張したばかりではなく、エリザベス女王を廃位する陰謀に関与し、リドルフィ事件(1570年)やカソリックのアンソニー・バビンドンがエリザベスの暗殺を謀ったバビントン事件(1586年)などの事件を起こした。この間の1572年に4代ノーフォー

²⁴ 1567年2月10日、エディンバラのカーク・オ・フィールドのプロヴィスツ・ロッジで爆発がおこり、その中庭でダーンリー卿が死んでいた。この首謀者がボスウェル伯ジェイムズ・ヘバーンであるという風評が流れ、さらに首謀者はボスウェル伯であるという張り紙さえ出された。しかし、真相は闇の中である。

²⁵ 2人は、ホリールードハウス宮殿から安全なエディンバラ城に移ろうとしたが、その衛兵に入城を拒否され、南ロージアンのあるボスウィック城、ダンバー城と逃げ回るが、1567年6月15日エディンバラ城の東13キロメートルのカーバリ・ヒルでボスウェル伯の自由な行動を約束するという条件で、メアリー女王は反ボスウェル軍に投降した。ボスウェル伯は逃走した。

1567年6月16日にメアリーはパースの南20キロメートルのロッチホルン城に移され、息子ジェイムズのために退位し、ジェイムズの教育を貴族に任せ、マリ伯ジェイムズ・ステュワートを摂政にすることを条件として、7月24日にメアリーの王位は廃位された。

²⁶ エリザベス1世は、ヘンリー8世とその2番目の王妃アン・ブリーンの間に生まれた。母アン・ブリーンの処刑後は、姉メアリーと同様にプリンセスの処遇を停止され、王位継承権を剥奪された。エリザベス女王は、宗教面では、プロテスタントあるいはカソリックなどの極端な宗派は避け、国教会の基礎を確立し、ピューリタンとカソリックの両極端を排除する政策を採った。内政面では絶対主義、外交面では海外進出の基礎をきづき、文化面ではイギリス・ルネッサンスの花を咲かせた国王であった。彼女は、女ヘンリー8世と言われた。彼女は、玉璽にアイルランド王国を示す「ハーブ」をイングランドの紋章に加えた。それが正式に採用されたのは、ジェイムズ1世においてであった。

²⁷ メアリーは、18年間イングランド北部のカーライル、ボルトン、チャッツワース、シェフィールド、中部のコベントリー、タイプューリー、そして最後にピータバラ西方のフォザリケン城を転々とした。その間、メアリーは、イングランド王位に正当な継承権があることを主張したばかりではなく、エリザベス女王を廃位する陰謀に関与し、幾多の事件を起こした。それは、リドルフィ事件(1570年)やカソリックのアンソニー・バビンドンがエリザベスの暗殺を謀ったバビントン事件(1586年)などであった。1572年に4代ノーフォーク公トマス・ハワードがメアリーと結託し王位を狙った。

ク公トマス・ハワード (Thomas Howard, 3rd Duke of Norfolk) (1473年生-1554年没) がメアリーと結託し王位を狙った。メアリーは、結局、1587年2月に処刑された。44歳であった。

メアリーは、イングランドで囚われの身であっても、なお正当なイングランド王位継承の権利を主張し、エリザベス女王の廃位を实行しようとした。王としての資格が十分に備わっているとは思えないメアリーが王位あるいは王権に拘ったのはいったい何のためであったのであろうか。

第2節 スコットランドの独立戦争と王権の復活

スコットランドは、アサル王家のマーガレット女王死後、イングランドの支配下(占領下)に入り、ジョン・ベイリヤル王 (John Balliol) (在位 1292年-1296年) 廃位後、国王代理のジョン・ドゥ・ワーレン (ジョン・ベイリヤルの妃イサベル・ドゥ・ワーレンの父) 総督の下にあった。1296年から1306年まで²⁸の10年間のイングランドに対する抵抗運動ならびにそれからの独立戦争においても、スコットランドでは国王不在が続いた。この戦争は、イングランド王に対するスコットランド王権の復活のための戦争であった。この間に国王不在を理由にして、スコットランドでは王制の放棄を決意することもなく、むしろ王権の復活のための戦いが10年間繰り広げられた。このスコットランド人の王制あるいは王権に拘る気質が、その独立戦争での勝利後に、イングランド人と異なる国民として、スコットランド人の国民性が形成されて来た、と推察される。

2.1 サー・ウィリアム・ウォリスの抵抗運動

ウィリアム・ウォリス (Sir William Wallace) (1272年?-1305年) は、偶然、不運にも、イングランドのラナク駐留の兵士とのトラブルに巻き込まれたときに、そのトラブルから彼を解放した女性をラナクの長官サー・ウィリアム・ヘゼリグ (Sir William Hezelrig) が、横暴にも、処刑した。その長官をウォリスが殺害したために、ウォリスは全国に指名支配された。そんな彼をスコットランド民衆は、支持し、庇い、彼の逃亡の手助けをし、彼を抵抗のリーダーと奉り上げた。このようなどこでも起こりそうなトラブルが、スコットランドの民衆を巻き込んだ抵抗運動に発展したのは、イングランド駐留とその駐留軍にスコットラ

²⁸ この間、スコットランドはイングランドに占領された。国王代理のジョン・ドゥ・ワーレンがスコットランド総督になり統治した。愛国者サー・ウォーリス・ウィリアム (Sir William Wallace) (1272年-1305年) はイングランド軍と戦うが、フォールカークの戦いでエドワード1世旗下のイングランドに大敗した。1305年にグラスゴウの近くでイングランド軍に捕らえられ、ロンドンに送られ、八つ裂きにされ、ベリク、スターリング、パースにおいて晒された。

ンド民衆が不満を持ち、その気持ちをぎりぎりまで抑えていたときに、ウォリスの怒りの行動に民衆が即発され、同調して抵抗行動に出たために、全国的な抵抗運動に発展したのであろう。

そのスコットランドのイングランド（イングランド王）に対する抵抗運動について概観してみよう。この運動のリーダーは、サー・ウィリアム・ウォリスであった。これは、イングランド軍のスコットランド駐留に対する抵抗した運動であった、と思われる。1297年のフォース川に架かるスターリング・ブリッジの戦いでは、サー・ウィリアム・ウォリス²⁹ 旗下の部隊が、イングランドのサリー伯ジョン・ウォレンヌと財務府長官ヒュー・クレッシンガムに率いられたイングランド軍を打ち破った³⁰。しかし、1298年のフォールカークの戦いでは、ウォリスはエドワード1世指揮下のイングランド軍に大敗し、その後、ウォリスはゲリラ戦で戦うが、1305年にグラスゴー近くで、イングランド軍に捕らえられ、ロンドンに送還された。政庁のウェストミンスター・ホールで裁判が行われ、八つ裂きの極刑に処され、彼の首はロンドン・ブリッジに、その八つ裂きの体はニューカースル、ベリク、スターリング、パースなど見せしめとして晒された。

2.2 ロバート・ブルースによる独立戦争

10年間のイングランド占領からスコットランドを救ったのは、ロバート・ドゥ・ブルース³¹ (Robert de Bruce) (1274年生? -1329年没) であった。1318年にロバート1世はスコットランドの完全な独立を勝ち取った。

彼は、ベイリヤル家 (The House of Balliol) とカミン家 (The House of Comyn) の連合とその支持者たちに対する戦いにおいて優位な立場を固めるために、エドワード1世側に付いて争っていたが、1306年にジョン・ベイリヤル王の甥ジョン・カミン (John Comyn) (1306年没) をダムフリース (Dumfries) にあるフランシスコ修道会のグレイフライアーズ教会 (Greyfriars Kirk) にて殺害した。そのためにキリスト教社会から追放されたが、ブルー

²⁹ 彼は、グラスゴー近くのベイズリー出身で、スコットランドの執事職ジェームズ・ステュアートの封臣であった。

³⁰ スターリング・ブリッジの戦いでの敗北を受けて、1297年10月12日にエドワード1世は諸憲章を再公布した。

³¹ スコットランド王ウィリアム1世 (William I) (在位1165年-1214年) の弟ハンティングダン伯デイヴィッドの玄孫に当たる。ロバート・ブルースの祖父も同名のロバート・ブルースであり、1291年から1292年にかけてスコットランド王位を争った王位競合者の一人であったが、王位継承者はジョン・ベイリヤルになった (1296年に廃止された)。ロバート・ブルースは、マー伯ドナルドの娘イサベラと結婚し、その娘マジョリーと8代ステュワードとの間に生まれたロバートがステュワード家の開祖になる。ロバート・ブルースは、1329年6月7日に西部ダムバートの西北ローモンド湖の南、クライド川に臨むカードウロスでその生涯を閉じる。ダンファームリンの僧院に埋葬される。

スは、ベイリヤル家とカミン家そしてその支持者達との王位継承戦において優位な立場を固めることが出来た。両家の連合は、1306年以来、ジョン・カミン殺害の復讐を果たすためにイングランド側についていた。その年の3月25日あるいは27日に、棕櫚の主日にスコーンで戴冠式を自作自演で挙けた彼は、スコットランド王ロバート1世³²を名乗った。しかし、彼には治める領土がなく、どこを治める王であったのか分からなかった。スターリングからベリクに至るロージアン地方の大きな要塞は、すでに、エドワード1世の手中にあり、主導権もエドワード1世に握られていた。彼の戴冠を知ったエドワード1世は、ペンブルク伯エイマー・ドゥ・ヴァランス (Aymer de Valence, Earl of Pembroke) (1265年生?-1324年没) 指揮下の軍を送り、パースに近いメスヴァンパークでロバート軍に大打撃を与えた。エドワード1世は、ロバート1世を討つことを必死に計画したが、彼は、西部のビュート島、ヘブリディーズ諸島、キンタイア半島、北のオークニ諸島と逃げて生き延びた。だが、彼の妻やその共の女たちは捕らえられた。

1307年にロバート1世旗下のスコットランド軍は、各地のゲリラ戦で勝利し、スコットランド南部西岸よりのグレントゥールル、グラスゴー近郊のラウダン・ヒルでイングランド軍を徹底的に打ち破った。出陣したエドワード1世は、カーライルからスコットランドに向かうソルウェー湾の南岸で赤痢に倒れ、1307年7月7日に68歳にて崩御した。イングランド王位を継いだエドワード2世³³ (在位1307年-1327年) は、政治を寵臣ギャヴスタン (Piers Gaveston, 1st Earl of Cornwall)³⁴ (1284年生?-1312年没) に任せ、スコットランド軍への

³² 彼は、救国、独立の英雄としてスコットランド紙幣に描かれている国王である。

³³ 1301年にプリンス・オブ・ウェイルズの称号が与えられた最初の人物である。今日においても、この称号はイングランド皇太子に与えられる。フランスの端麗王フィリップ4世の娘イザベラと結婚し、1308年2月25日、エドワード2世とイザベラは戴冠した。エドワードは、「王国共同体が選ぶ正当な法と慣習を守り、維持する」と宣誓した。後に、王冠・王権という制度と王個人の人格とは別個の存在という理念の確立に繋がった。エドワード2世は、1326年王妃イザベラと彼女の寵臣ロジャー・ドゥ・モーティマー (Roger de Mortimer, 1st Earl of March) (1287年生?-1330年没) と争い敗れ、宮廷人ディスペンサー父子と共々捕らえられた。1327年に、パーラメントによって王位が廃止された。その罪状は、王の救いがたい無能さ、国の教会と貴顕者に多大な害をなした事、スコットランドを失った事等であった。王との臣従を放棄することによってエドワード2世は王位から降ろされた。私人としてパークリー城に監禁され、1327年9月に殺害された。

³⁴ 彼はフランス南西部のガスコニーの低い身分の出であった。彼の父がエドワード1世に仕えていたことから、エドワード1世国王の知るところとなり、国王は彼を息子エドワードの模範とすることを望んだ。彼は、ウェールズ皇太子エドワードの同行者として行動を共にした。1307年2月にエドワード1世はギャヴスタンが国を去ることを求めた。というのは、エドワード1世は、息子のギャヴスタンに対する入れ込み(自身の土地であったポアティアを彼に与えると申し出るほどの思い入れ)に怒りを感じたからであった。しかし、エドワード皇太子は、ギャヴスタンの海外への出発に際し、彼に馬、綺麗な衣服、さらに260ポンドの金銭を持たせた。1307年7月7日にエドワード1世が逝去すると、ギャヴスタンは直ぐに戻り、2人は再開した。

対応を地元総領事に任せきりであった。1312年に寵臣ピアーズ・ギャヴスタンが疑わしい権威³⁵によって殺害されたことにより、エドワード2世と伯爵たちの間に決して消えることのない敵意による亀裂が生じ、エドワード2世の宮廷内は2派に分裂した³⁶。この分裂に乗じてロバート1世は、北イングランドを侵攻した。一時的な休戦のためにノーサンバーランド、カンバーランド、およびウエストモールランドの人々は、少なくとも、10年間で2万ポンドをス

彼は、エドワード2世に即位すると、直ぐに、ギャヴスタンをコーンウォール伯に叙した。この伯爵位は、ギャヴスタンにイングランドの広い領域において土地保有をもたらした。例えば、南西部のコーンウォールやデボン州、バーク州やオックスフォード州にある土地、リンカーン州の東部、さらにヨーク州のKnaresborough等であった。またエドワード2世は、ギャヴスタンに力の強いグロスター伯の娘マーガレット・ドゥ・クレア (Margaret de Clare) との結婚を保証し、ギャヴスタンの地位を高めた。クレアは、エドワード2世の姪であり、エドワード1世の孫であった。実際、その当時、外国の貴族とイングランド皇室の結婚は希であった。

エドワード2世がイザベラとの結婚のためフランスに出て行くとき、ギャヴスタンを摂政役にした。この役は王室関係者に与えられた責任職であった。エドワード1世に仕えていた伯爵達は、たとえばリンカーン伯ヘンリー・ドゥ・レシー、ウオーリック伯ガイ・ドゥ・ボウチャンプ、ペンブローク伯エイマー・ドゥ・ヴァレンスなどは、ギャヴスタンの横柄な態度に不愉快にされた、と不平を漏らした。彼らは、1308年にギャヴスタンの2度目の国外追放(アイルランドへの追放)を宣言した。エドワード2世は、渋々に彼をその5月に追放することに同意したが、実際に、ギャヴスタンはその7月まで国内に居た。しかし、国外追放にも拘わらず、ギャヴスタンはコーンウォール伯を剥奪されたことの代わりに、エドワード2世から、フランスのガスコニーに3千マルクの土地と、イングランドには以前と同額の土地が与えられた。翌年の6月にギャヴスタンはアイルランドから戻った。

ギャヴスタンがさらに横柄になり、伯爵や司教やパロンは、ギャヴスタンの横柄な言動に不満を懐き、ギャヴスタンを解雇しない限り議会に出席しないと主張した。エドワード国王は皇室改革をする人々のグループ (Lords Ordainers) を任命した。これは、8人の伯爵、7人の司教、6人のパロンから構成された。1310年9月から、イングランド北部に侵攻するロバート・ドゥ・ブルースを宰相とするスコットランドを食い止めるための戦争中であったエドワード国王は、ロバート・ブルースとの戦いに苦戦していた。国王は、ギャヴスタンをスコットランド副官に任命し、1311年2月にスコットランドからロンドンに戻り、議会を開き、1311年9月に皇室改革の提案とギャヴスタン追放に同意した。ギャヴスタンは1311年11月にイングランドから追放された。これは彼の3度目の国外追放(アイルランドおよびアキテーヌを除く国外)であった。国外からイングランドに戻ると、ギャヴスタンを捕らえ処刑することが条件であった。

³⁵ 1311年のクリスマスか1312年のはじめに、追放されていたギャヴスタンがイングランドのスカーボロに戻り、エドワード国王は、彼と再開し、彼の追放が不法であると宣言し、彼に全ての土地を返した。これによって、イングランド内では、国王やギャヴスタンと伯爵やパロンの対立が確実になった。1312年5月にペンブローク伯、ワーレン伯、ヘンリー・パーシー、ロバート・クリフォードなどはスカーボロのギャヴスタンを包囲し、彼を国王の居たヨークに連れて行き、そこで国王と交渉する予定であった。ペンブローク伯が護衛しギャヴスタンをヨークより南まで連れて行く筈であったが、しかし、ギャヴスタンは、ウオーリック伯に捕らえられ、何人かのパロンとランカスターのトーマスやウオーリック伯などからなる集会において、国外からイングランドに戻ると捕らえ処刑するという Ordinance の条件によって、彼は処刑を宣告された。1312年7月に、ランカスター伯の領地の Blacklow Hill 辺りに連れ出され、突き刺され、首を刎ねられた。ギャヴスタンの処刑に国王はサインしていなかった。何の権威で処刑されたのであろうか。

³⁶ 1311年にパーラメントに出された改革条例 (Lords Ordinance) では、国王は、諸侯の同意なしに中央および地方の統治行政に係わる役職を授与してはならず、同意なしに王の土地を授与してはならず、王は国を出るべきではなく、戦争をするべきではない、など諸侯 (貴族) の力が強かった。

コットランド王ロバート1世に支払った³⁷。スコットランドによる北イングランド襲撃は、エドワード2世の支配権を弱体化させた³⁸。ロバート1世側は、パース、ダンディー、ダムフリース、ロクスバラ、エディンバラを解放し、1314年にハノックバーン (Bunokburn) の戦いで勝利し、スターリングとベリクにあったイングランド基地の軍を排除し、スコットランドから全イングランド軍を追放した。スコットランドは、1318年に、最後のイングランド軍基地ベリクを奪回し、完全な独立を勝ち取った³⁹。

スコットランドは、独立戦争を繰り広げてスコットランド王権の復活を果たした。なぜ王あるいは王権の復活に拘ったのであろうか。スコットランドでは、部族(地方の豪族)や有力貴族の間における争いが絶えることがなく、国内に平和(仮初めの平和)を維持するためには王の権威を必要とした、と推測される。国内の政治的安定とイングランド王に対抗するスコットランド王権の保持の必要性から、スコットランドは王あるいは王制に拘ったとも考えられる。

2.3 独立直後のスコットランド王権

イングランド(イングランド王)からの完全な独立を果たした後にも、スコットランドはイングランド王の影響下あるいはその統治下に置かれた。ロバート1世の後継者は愚王デイヴィッド2世⁴⁰で、5歳で王位に就いた。彼の摂政は、マリ伯トマス・ダンダルフ (Thomas Randolph, Earl of Moray) (1332年没)であった。すでに、ロバート1世の治下でスコットランドは独立を達成していたが、しかし、その独立はイングランドの愚王エドワード2世の失政に多分に依存していた。実際、スコットランド王権は、イングランド王エドワード3世 (Edward III) (在位1327年-1377年)の脅威に晒されていた。フランスの端麗王フィリップ4世の娘イサベラがエドワード3世の王母であったので、フランス王位⁴¹の継承権に強い関

³⁷ ダーラムとノーサンバーランドの人々は、2,000ポンド支払い、カンバーランドやウエストモアランドの人々はそれよりも少額であったが、その差額分は人質を差し出した。

³⁸ さらに、スコットランド軍は南下し、ヨークシャーを襲撃し、ノーサントンとバラブリッジを焼き尽くした。1319年に諸聖人の旗の下で、「旗の戦い」がスコットランド軍と戦われたが、敗北した。イングランド人の誇りが大きく傷ついた。

³⁹ 完全な独立が認められたのは1328年のエディンバラ・ノーザンプトン条約によってであった。これで第1次スコットランド独立戦争は終結し、スコットランドに平和が訪れたかと思われたが、しかし、その独立は再びイングランドの侵攻によって脅かされる事態になった。またローマ教皇との関係では、1322年にローマ法王ヨハネス22世は、ロバート1世の破門を解き、スコットランド王として認証した。

⁴⁰ デイヴィッドは、7歳の時、エドワード2世の娘ジョアンと結婚している。この仕掛け人は、エドワード2世の王妃イザベル(フランスの端麗王フィリップ4世 (Philippe V) (在位1285年-1314年)の娘)と寵臣ロジャー・ドゥ・モーティマーであった。スコットランドとの和解を目論んだ政略結婚であった。

⁴¹ エドワード3世の母であるエドワード2世の王妃イザベルは、フランスの端麗王フィリップ4世(在位1285年-1314年)の娘であったので、エドワード3世には王位継承権があった。その後、ルイ10世 (Lois X)

心をもっていた彼は、フランスがアキテーヌ領ガスコーニュ⁴²の没収を宣言し、ガスコーニュに進軍してきたのを機に、フランスに宣戦布告し、「百年戦争」⁴³(1338年-1450年ごろ)に突入した。百年戦争開始後、イングランドの宿敵はスコットランドからフランスに変わった。対フランスとの戦争は、宿敵スコットランドとの紛争から派生したものであった、と見ることもができる。

スコットランドと同盟を結んでいたフランスからの脅威を小さくするため、スコットランドの力を押さえること、あるいはスコットランドを味方に付けておくことに関心を持っていたエドワード3世は、ロバート1世を継いでデイヴィッド2世⁴⁴が戴冠式を行うと、フォース湾(Firth of Forth)の北側のファイフ(Fife)地域一帯に屯していた貴族(ロバート1世に土地を没収された貴族⁴⁵)の要請を受けて、1332年8月にスコットランドのファイフに上陸し、スコットランド軍を敗退⁴⁶させた。ジョン・ベイリヤルの長男エドワード・ベイリヤル(Edward

(在位1314年-1316年)、ジャン1世(Jean I)(在位1316)、フィリップ5世(Philippe V)(在位1316-1322)、シャルル4世(Charles IV)(在位1322-1328)とカペー王朝が続いた。フランス王フィリップ6世(Philippe VI)(在位1328年-1350年)は、それまでのカペー王朝に代わって、ヴァロア王家を開くと、イングランド王エドワード3世とフランスのヴァロア王朝とは姻戚関係がなく、エドワードの王位継承権はなくなった。イングランドとフランスとのいがみ合いは、さらにエスカレートした。

⁴² イングランド王はガスコーニュ公の地位にあった。よって、イングランド王はフランス王即位に際して臣従礼をしなければならなかった。

⁴³ フランス王位継承の訴えがイングランド王エドワード3世によって1337年に初めて示された。エドワード3世は、自分こそはフランス王であり、その権利は母イザベラから伝えられる、と述べた。しかし、この要求は国家目的と言うよりもエドワードの個人的な目的であった。

エドワード3世軍は、1346年に、ノルマンディーに上陸し、ポンティユー伯領クレシーの陸戦でフランス軍に大勝した。イングランド軍は3部隊に分かれて戦った。皇太子ブラック・プリンスの異名をもつエドワードは、ウォリック伯トマス・ドゥ・ボーチャンプ(Thomas de Beauchamp, 11th Earl of Warwick)とオックスフォード伯ジョン・ドゥ・ヴェール(John de Vere, 7th Earl of Oxford)(1312年生-1360年没)と共に800人の騎兵、2,000人の弓兵、1,000人の歩兵からなる部隊を指揮した。残りの2部隊は、ノーサンプトン伯ウィリアム・ドゥ・ボーハン(William de Bohun, 1st Earl of Northampton)(1312年生-1360年没)とアランデル伯リチャード・フィッアララン(Richard FitzAlan, 10th Earl of Arundel)(1306年生-1376年没)の指揮下の部隊と王の指揮下にある部隊であった。また皇太子ブラック・プリンス・エドワードは、ポワティエの戦い(Battle of Poitiers)(1356年)で善良王ジャン2世(Jean II)(在位1350年-1364年)を捕虜にする大勝をあげた。1360年にブレイリーで英仏の和議が成立し、エドワード3世はフランスの王位継承権を放棄する代わりに、アキテーヌ(Aquitaine)、カレー(Calais)、ポインティア(Poonthieu)、ギズネ(Quynne)などの主権を獲得した。1375年にブリュージュ(Bruges)における休戦条約を機に、エドワード3世の英仏戦争は終わった。この戦争の終結後に、イングランドとフランスの国境線が確定した。これ以後、両国の国民意識が確立された。

⁴⁴ デイヴィッド2世が王位を継承したのが1329年であったが、戴冠式は1331年11月であった。

⁴⁵ イングランドでは、イザベラとモーティマーの失脚後、国外追放から帰国した有力者はスコットランドの諸領地への請求権を持ち、自分達の指導者をジョン・ベイリヤルの息子エドワードに見いだしていた。

⁴⁶ 摂政マリ伯トマス・ダンダルフが急死し、その後を継いだ摂政マー伯ドナルド・マーは、1332年8月のダップリン(Dupplin Moor)の戦いで戦死した。スコットランド王軍は敗退した。

Balliol) (在位 1332 年 8 月-1332 年 12 月, 1333 年-1346 年) を王位に就けることを約束していたので、実際に、エドワード 3 世は、彼に協力したスコットランドの貴族と共にスクーンに向かい、そこでエドワード・ベイリヤル王の戴冠式を挙行了。デイヴィッド 2 世は、1332 年 3 月 3 日に王座を追われ、一時的に王座を退いた。このようにして、エドワード 3 世の後押しで国王になったエドワード・ベイリヤルは、イングランド王エドワード 3 世に「臣従を誓い」、ベリクの町ならびにその周辺をイングランドに提供し、スコットランのローランドの殆どの地域をエドワード 3 世に割譲した。スコットランドの南部から中部にかけてイングランド軍が駐留⁴⁷し、そこにはイングランドの商人と聖職者であふれていた。エドワード・ベイリヤルの政策に不満を持つ貴族が彼に剣を向け、スコットランドは内乱状態になった。これはスコットランドのエドワード 3 世の宗主権からの独立運動でもあった⁴⁸。第 2 次独立戦争の間、王位を奪われたデイヴィッド 2 世は、王妃ジョアンと共に、フランスのフィリップ 6 世 (Philippe VI) (在位 1328 年-1350 年) を頼って逃げ、7 から 8 年間 (1333 年から 1341 年の間) ノルマ

⁴⁷ スコットランドには強固な城塞のネットワークが無いので、常備軍を駐留させる必要があった。しかし、高額な費用が必要であった。たとえば、1333 年 5 月から 7 月までの 3 ヶ月で 2 万 5,000 ポンドの軍事費が必要であった。

⁴⁸ この戦いは一種の市民戦争であり、第 2 次スコットランド独立戦争であった。これはエドワード 3 世の宗主権からの独立を実現するための戦いであった。その戦いには、摂政マー伯が戦死したダップリン・ムーアの戦い (Battle of Dupplin Moor) (1332 年 7 月)、エドワード・ベイリヤルを破ってベイリヤル軍をイングランドに敗走させたアナン⁴⁹の戦い (Battle of Annan) (1332 年 12 月)、指揮官であったウィリアム・ダグラスが捕らわれデイヴィッド派が敗北したドーナックの戦い (Battle of Dornock) (1333 年 3 月)、摂政アーチボルド・ダグラス (愛国者の Sir Archibald Douglas) が戦死したハリダンの戦い (Battle of Halidon Hill) (1333 年 7 月) があり、これらの戦いの後に、エドワード・ベイリヤルが支配権を握った。よって、生命の危険を感じたデイヴィッド 2 世はフランスに亡命した。ジョン・ダンドルフ (John Randdolph, 3rd Earl of Moray) (1300 年生?-1346 年没) が摂政に就き、ベイリヤル軍と戦ったバラムアアの戦い (Battle of Boroughmuir) (1335 年 7 月) では、デイヴィッド派が勝利したが、摂政マリ伯は捕らえられイングランドに 5 年間監禁された。次に、摂政役にサー・アンドリュー・マリー (Sir Andrew Murry) が選ばれたが、スコットランド中央および南部はベイリヤルならびにエドワード 3 世に支配され、スコットランドは国家的に危機的な状態にあった。摂政アンドリュー・マリーがエドワード 3 世の政策を遂行していたアサル伯デイヴィッド (David III, Titular Earl of Atholl) (1309 年生?-1335 年没) と戦ったカルブリーンの戦い (Battle of Culblean) (1335 年 11 月) で勝利した。この勝利で、スコットランドの支配権がベイリヤル派からデイヴィッド派に移った。この一連の戦いは第 2 次スコットランド独立戦争の前半戦であった。その後、第 2 次スコットランド独立戦争の中盤戦である。エドワード 3 世は、フランス軍がスコットランドから南下し、イングランドに攻め入る可能性を潰すために、スコットランドを侵攻した。1338 年のダンパーの戦い (Battle of Dunbar) におけるアグネス・ランドルフ (マーチ伯パトリックの婦人) の活躍によってソールズベリー伯 (William Montacute, 1st Earl of Salisbury) (1301 年生-1344 年没) を撤退させた。スコットランドのデイヴィッド派の力が強くなり、デイヴィッド 2 世は、亡命先のフランスからスコットランドに帰国したが、1346 年のネヴィルズ・クロス⁵⁰の戦い (Naivil's Cross) によって、スコットランドのデイヴィッド派は大きな敗北をした。国王はイングランドに捕らえられ、ロンドン塔に監禁された。ネヴィルズ・クロス⁵¹の戦いの後がこの戦争の後半戦である。

ンディーのシャトー・ガイヤールで亡命生活を送った⁴⁹。1341年にデイヴィッド2世は、成人し、スコットランドに帰国した⁵⁰。デイヴィッド2世がフランスで亡命生活を送っている間、スコットランド国政を司っていたのは、王の甥であったロバート・ステュワート(ステュワート家の開祖で、ロバート2世)などの摂政役の貴族⁵¹であった。デイヴィッド2世の帰国にロバート・ステュワート達の摂政役の貴族の働きも無視できない。彼らは、イングランド駐留軍の駆逐に力を発揮し、西部のビュート島からイングランド守備隊を追い払い、南部東岸ダンバーの戦いではマリ伯トマス・ランダルフの娘ダンバー伯夫人アグネスの活躍でダンバー城の防衛⁵²に成功した。翌年、フランスの援軍を得てパースを取り返し、1340年にフォース湾の北側からイングランド軍を一掃した。イングランド軍を駆逐することに成功した1341年にデイヴィッド2世が帰国した、と考えられる。しかし、愚王デイヴィッド2世は、フランス王フィリップ6世⁵³の要請を受けて、3万の軍を携えて、1346年にイングランドを侵攻した。その結果は明らかであったが、1346年にネヴィルズ・クロスの戦いにおいて完膚無きまで撃ち破られ、デイヴィッド2世は、逮捕され、囚われの身となり、ロンドン塔に11年間軟禁された。

エドワード3世は、デイヴィッド2世とエドワード王の妹王妃ジョアンの間に嗣子が無かったので、王位継承問題に関心を持ち、スコットランド内の反対を押し切り、エドワード・ベイリヤルに2,000ポンドの年金を与え、スコットランド王国の譲渡を受けた。エドワード3世は、1356年にスコットランド王国の直接統治を宣言した。しかし、戦禍で疲弊したスコットランドから得るものもなく、侵略する価値のない地域と見なした。彼のその思いを決定づ

⁴⁹ 1333年から1356年の間、スコットランドには2人の国王がいたと考えられる。1人はデイヴィッド2世であり、他はエドワード・ベイリヤルである。しかし、前者は、1334年から1341年までフランスに逃亡しており、後者は、1332年にイングランドに逃げたままであった。エドワード3世は、1356年に2,000ポンドの年金をエドワード・ベイリヤルに与え、スコットランド王国を引き受けた。デイヴィッド2世は、1346年に、ネヴィルズ・クロスの戦いにおいて完膚無きまで撃ち破られ、囚われの身となり、ロンドン塔に軟禁された。

⁵⁰ デイヴィッド2世の帰国は、イングランドとの戦いを好転させることを狙ったフランス王フィリップ6世の指示によるものであったかもしれない。

⁵¹ この間、1334年から1335年までは、マリ伯ジョン・ランダルフ(John Randolph, 3rd Earl of Moray)(1300年生-1346年没)、1335年から1338年まではサー・アンドリュー・マリー(Sir Andrew Murray, Andrew de Mary of Avoch)(1298年生?-1338年没)およびその後はロバート2世(在位1371年-1390年)として即位したロバート・ステュワート(Robert Stewart, Earl of Strathearn)(1316年生-1390年没)との共同で摂政役を務めた。

⁵² 1338年のことである。

⁵³ フィリップ6世は、クレシーでイングランドに大敗し、カレーも押さえられたので、デイヴィッド2世に北からのイングランド侵攻を要請した。

けたのは、1356年にポワティエの戦いでブラック・プリンス⁵⁴ (Black Prince) (1330年生-1376年没) がフランス軍に大勝利したことであった。エドワード3世は、フランス征服の夢の実現も不可能では無いと思い直し、フランス支配の道が開けたと判断し、ベリクで10年の休戦条約を結び、10万マルクの身代金でデイヴィッド2世を釈放した。この10万マルクの身代金は、スコットランドを財政的困難な状態にしたが、何とかこの難を凌げたのは、スコットランドを苦しめていたペストであった。イングランドでも1348年、続いて1349年、1361年、1368年と4回のペスト⁵⁵ に苦しめられ、人口の激減⁵⁶ と労働力の減少に陥り、イングランド自身がスコットランドに攻め入る余裕が無かったのである。またスコットランドは財政難を切り抜けるために、ノーブル貨を鑄造している。この硬貨の表面には、スコットランド王の紋章が刻印されていた。この鑄造をスコットランド議会在決めたのは、スコットランドがデイヴィッド2世の身代金を支払うことを決めたベリク休戦条約が結ばれた翌年(1357年)であった。1349年以降はスコットランドにもペストが広がり、スコットランドの経済力は低下した。またデイヴィッド2世の保釈金を払うために、スコットランド議会は国民に増税を課した。

すでに述べたように、デイヴィッド2世は、7あるいは8年間、ジョアン王妃と共にフランスのシャトー・ガイヤールに亡命生活を送り、1341年に帰国するが、その間、スコットランドでは国王が不在であった。その後もスコットランド国王がイングランドに囚われの身となったが、スコットランドでは王制が保持された。スコットランドが王国制⁵⁷ を廃止すること

⁵⁴ エドワード3世とその王妃フィリッパの間には、8男5女の王子や王女があった。2男と6男と3女は死亡した。ブラック・プリンス(エドワード黒太子)は長男、3男はクラランス公クラランス・オブ・アントワープ(Lionel of Antwerp, 1st Duke of Clarence) (1338年生-1368年没)、4男はランカスター公ジョン・オブ・ゴント(John of Gaunt, Duke of Lancaster) (1340年生-1399年没)、5男はヨーク公エドモンド・オブ・ラングリー(Edmund of Langley, Duke of York) (1341年生-1402年没)であった。

⁵⁵ ペストはいえネズミを介して感染した。これは黒死病と呼ばれた。この源は、中央アジアのステップ地帯であり、海を経由して地中海を通じて、ヨーロッパ北部を結んでいる航路に沿って広がった。イングランドに最初に渡ってきたのは、ドーゼット州メリカム・リージスあるいはハンプシャー州サウスハンプトンあるいはグロスター州ブリストルであったと言われている。1348年までにはイングランドの南部を経てロンドンまでに達していた。黒死病の症状では、脇の下あるいは足の付け根にあらわれる腫れ物で、それは膨れあがって腐肉のように悪臭を放し、最後には破裂する。3から5日で死に至る腺ペスト、あるいは、肺に達し咯血を引きおこし、腺ペストよりも早く死ぬ肺ペストがあった。

⁵⁶ 正確なイングランドの人口についてのデータを得ることはできない。その数を探る方法は幾つかある。たとえば、国王が人頭税を課すときの人口調査である。このデータから1330年代の人口は500万人であったが、リチャード2世治世(14世紀末)の人口は200万人と推定されている。黒死病経験後に人口は半減したことになる。人口減少の要因は、黒死病のみではなく、結核や汗かき病などのペスト以外の伝染病で死亡する人口の方が多かったと考えられている。

⁵⁷ ロバート1世の後に王位はデイヴィッド2世に後継されたが、一方ではイングランド王エドワード3世が

なく維持できたのは、第1に、国王の亡命中や囚われの身の間、ロバート・ステュワートやマリ伯トマス・ランダルフやマー伯ドナルド・マーが摂政を努め、実質的な国政の舵取りを行ったこと、第2に、1337年にイングランドとフランスの間で百年戦争に入ったこと、第3に、1348年、1349年、1361年、1368年の4回に亘ってイングランドでペスト⁵⁸が蔓延したために、イングランドにはスコットランドに攻め入る余裕が無かったことである。このことによって、スコットランドには仮初めの平和が続いた。デイヴィッド2世は無為で怠惰な政治姿勢⁵⁹を採ったにもかかわらず、スコットランドは王国制を保持した。

アサル王家の少女マーガレット女王がノルウェーからスコットランドに向かう船上で船酔いのために死亡してから、ステュワート王家が開かれるまでの80年間は、完全な独立を勝ち取ったとしても、スコットランド王国はイングランドの脅威に晒される中で、国政の舵取りをしなければならなかった。エドワード3世に翻弄され、スコットランドを売ったと揶揄された王デイヴィッド2世とエドワード・ベイリヤル王の2人が世継ぎを残さないまま他界した後、デイヴィッド2世の摂政を務めたロバート・ステュワートが、1371年にスコットランド王ロバート2世（Robert II）⁶⁰（在位1371年-1390年）として即位し、ステュワート王家⁶¹のもとでスコットランド王制が維持された。また1377年にはエドワード3世も他界し、イングランドによる直接統治による支配の恐怖が終了した。スコットランド人が、ステュワート王家の王制のもとで、国家としてのアイデンティティを持ち始めたのは、その直接統治後であった、と推測される⁶²。同時に、2度に及ぶスコットランド独立戦争の勝利によって、スコットランド人としての国民意識が形成された、と理解される。

エドワード・ベイリヤルをスコットランド国王として認めていた。1333年から1356年までの間には、スコットランドには2人の国王が在位していたが、しかし、その2人の国王は、その間の殆どの時間を外国（デイヴィッド2世はフランスとイングランド、エドワード・ベイリヤルはイングランド）で生活していた。2人の国王が不在の時には、マリ伯トマス・ランダルフやマー伯ドナルド・マーはデイヴィッド2世の摂政を努め、1333年以降はロバート・ステュワート（後にロバート2世になる）が摂政を務めた。

⁵⁸ ペストは、イングランドの人口を激減させ、その激減は労働人口の減少と経済の破綻をもたらした。

⁵⁹ デイヴィッド2世は、ネヴィルズ・クロスの戦いでイングランドに囚われ、11年間捕虜の身であった。しかし、1357年10月、ベリクでイングランド王エドワード3世は休戦条約を結び、10万マルクを10年間で返済することを約束にデイヴィッド2世の保釈を決めた。

⁶⁰ ロバート1世の娘マジョリーと8代ステュワードのウォルターとの間に生まれたのがロバート・ステュワートであった。

⁶¹ この家名は、本来ステュワードという職名であった。宰相役兼財務長官の役目を果たしていた。歳入の責任者で、戦争には国王と行動を共にする国王第1の側近であった。マルカム4世の時代からステュワートを名乗った。

⁶² ステュワート王朝の政治と経済については、別稿で示すが、その統治には、イングランド王とフランス王の影が見え隠れする。

2.4 王権の伸張と王権の確立

ステュワート王家のジェームズ4世 (James IV) (在位1488年-1507年) は、スコットランド王権を回復⁶³させ、王権を確立⁶⁴させた国王であった。それは、一面では、彼の果敢な行動と先見性によっていた。このことを幾つかの観点から確認し検証してみよう。第1に、ジェームズ4世の果敢な行動力による王権の回復と彼の人材の登用である。スコットランド王権を侮っていた5代アンガス (Angus) 伯アーチボルド・ダグラス (Archibald Douglas, 5th Earl of Angus) (1449年生-1514年没) は、1491年にヘンリー7世⁶⁵ (Henry VII) (在位1485年-1509年) と謀反を企てようとした。その謀反の情報を入手したジェームズ4世は、迅速果敢な行動をとり、東ロージアンズのアンガス伯の居城を包囲し、アンガス伯を閉じ込め、さらにアンガス伯の持ち城であった、ロクスバラシャー (Roxburghshire) のハーミティジ城⁶⁶ (Hermitage Castle) を没収した。しかし、通例に反して、ジェームズ4世はアンガス伯を反逆罪で処罰することはなかった。また、中世の多くの王とは違い、ジェームズ4世は没収した領地に代え

⁶³ ソーキバーンで皇太子ジェームズを擁してジェームズ3世を抹殺した有力貴族は、論功行賞に預かることを当てにした。5代アンガス伯アーチボルド・ダグラスは、摂政気取りで諸事を仕切り、またアーガイル伯コリン・キャンベルは、イングランド大使、パトリック・ヘバーンは、海軍長官職とポスウェル伯爵になっていた。この貴族の力が復活していたが、ジェームズ4世は王権の確立に努力した。

⁶⁴ スコットランド王権の伸張とその確立に関する詳細については、『王権の伸張と同君連合の成立——中世スコットランドの窓から(2)——』(経済論集第3号:59頁から133頁)を参照する。

⁶⁵ ヘンリー7世は、テューダ王家の開祖である。ヘンリー5世の王妃キャサリン・オブ・ヴァロアは、ヘンリー5世の病死後(1422年)に、議会で反対されながらも、王太后付納戸係秘書官で一介の騎士程度の身分にすぎないウエールズ出身のオウェン・テューダと再婚した。2人の間に、1430年、エドマンドが生まれた。ヘンリー6世は、異父弟エドマンドをリッチモンド伯に叙爵し、全伯の最右翼とし、破格の待遇をした。このリッチモンド伯によって彼は、1455年に名門サマーセット公ジョン・ボーフォードの娘マーガレットを妻に迎えることができた。このマーガレットは、ランカスター公ジョン・オブ・ゴント(エドワード3世の5男)の曾孫であった。

エドマンドとマーガレットの間に生まれたヘンリーが、後のヘンリー7世であった。彼は、彼の母マーガレットによってランカスター家の血筋に繋がっていた。またエドワード3世の5男ジョン・オブ・ゴントに繋がる血筋であったので、本来であれば王位継承権を持っていたが、王位継承権から排除されていた。サマーセット公ジョン・ボーフォードは、ジョン・ゴントと第3番目の妃キャサリン・スウィンフォードとの間に生まれていたが、2人が正式に結婚する前に生まれていた。ジョン・ボーフォードは、庶子であったが、2人が正式に結婚し、嫡出子と認められたが、ヘンリー4世によって、王位継承権から排除されていた。リッチモンド伯の母マーガレットには王位継承権はなかった。当然に、その子孫であるヘンリー7世にも王位継承権はなかったので、ヘンリー4世と同様に、彼は王位篡奪者であった。1485年8月、ボズワースの戦いでリチャード3世を打ち破り、実力でヘンリー7世の王位を奪取した。

⁶⁶ この城は13世紀の中頃に建てられた。1338年にラルフ・ネヴィル (Sir Ralph de Neville) をウィリアム・ダグラス (Sir William Douglas) が包囲し、奪ったが、しかし、彼は同名の初代ダグラス伯ウィリアム・ダグラス (William Douglas, 1st Earl of Douglas) (1327年生-1384年没) に殺害され、この城は、相続遺産として、初代ダグラス伯のものになった。彼が、その城をダーラム大聖堂の石工職人長 (master mason) のジョン・ルーヴァン (John Lewin) の助けによって、現代の城に建て替えた。

て、他の領地をアングス伯に与えた。その上、その後、アングス伯を宰相に据えている。

第2に、ハイランド地方に対して王権を浸透させ、その王権の伸張を図った。ジェイムズ4世は、氏族制度によって強く団結していたハイランド地方の首長たちを王権の下に置くための努力をした。それまでは、ハイランド地方の隅々までには王権⁶⁷は及んではいなかった。実際に、ジェイムズ4世が国王に就いた時には、州長官(シェリフ)は、既に氏族首長の命令執行機関⁶⁸となり、ハイランド地域は氏族の独立国家のようであり、王権の及ばない完全に独立した地域であった。ジェイムズ4世は、ロス(Ross)伯ならびにイール卿ジョン・マクドナルドをめぐる内紛と反抗に乗じて、ハイランド地域への王権の浸透とそこでの王権の伸張を図った。ジョン・マクドナルドが、9代ダグラス伯ジェイムズ(James Douglas, 9th Earl of Douglas)(1426年生-1488年没)と共に、1462年にエドワード4世(Edward IV)(在位1461年-1470年, 1471年-1483年)と結んだウエストミンスター・アードトーンニッシュ協定(Treaty of Westminster-Ardtornish)の反逆行為が尾を引き、1475年に彼はロス伯を召し上げられ、ネアン(Nairn)やインヴァネス(Inverness)州長官地位およびキンタイヤ(Kintyre)やクナップディル(Knappdale)の領主権を取り上げられた。これを不満とするジョンの庶子アングス・オグ⁶⁹(Aonghas Óg MacDonald)(1490年没)は、その父とスコットランド国王に対して反抗し、軍を起こした。このために、西部ハイランドでは1480年から1490年まで

⁶⁷ ハイランド地方への王権の伸張は、デイヴィッド1世、アレクザンダー2世ならびにアレクザンダー3世によって進められた。デイヴィッド1世が封建制度のハイランド地方への浸透の足場を築いたが、この時、ハイランドは氏族制度の下にあり、ノルウェイに臣従していた。アレクザンダー2世は、デイヴィッド1世が築いた足場を踏み台にし、王権をハイランドの北部に浸透させた。マリ、ケイネス、サザーランドに王権の浸透をもたらした。しかし、ハイランドのアーガイル地域では、依然として、イール領主などはスコットランド王権に反抗していた。アレクザンダー3世は、ノルウェイからヘブリデー諸島を奪回し、スコットランドの西部を王権の支配下に置く準備を果たした。依然として、イール卿は独立していた。アレクザンダー3世(正確には、マーガレット女王)以降、スコットランドはイングランド(エドワード1世およびエドワード3世治世のイングランド)との間で、スコットランド南部(ノーサンバーランド地域あるいはカンバーランド地域)の支配をめぐる争いのため、あるいは、フランス王権とイングランド王権のフランス王の継承に絡む内紛に係ったため、スコットランドの内政あるいはハイランド地方に対する王権による統制は遅れていた。

⁶⁸ デイヴィッド1世以来、ハイランドの地方の出先機関にシェリフ(州長官)が任命させ、置かれていたが、スコットランドの王権の目が南部と中部に釘付けになったころから、シェリフは任命制から相続制へと変化した。これは、シェリフが国家の出先機関であるにも拘わらず、王権の及ばない機関になっていた。

⁶⁹ アングス・オグ(Aonghas Óg)は、初代アーガイル伯コリン・キャンベル(Colin Campbell, 1st Earl of Argyll)(1433年生-1493年没)の娘イザベラ(Isabella)と結婚した。彼は、彼の父ジョンを領地から追い出し、オグはDomhnall BallachやMacDomhnall Mac Aonghais(chief of MacDonald of Keppoch)ならびにMacLeods of Lewisの支持を得て、父ジョンはスコットランド王、アサル伯ジョン・ステュワート、親戚のMacLean, MacLeod, MacNeillの支持を得て、親子が争った。オグが、父のガレー船を破壊し勝利したThe Battle of the Bloody Bay(1480年から1483年)の争いが起こった。またオグは、アサル伯の率いる王軍との戦いでも勝利した。

マクドナルド対マクロード、マッケンジーの氏族間の抗争が続くが、その混乱もアングス・オグの殺害によって終結した。しかし、翌年、ジョンの甥のアレクザンダーがロス伯位の復権を要求して立ち上り、イール卿ジョン自身も反乱に加わり、甥のアレクザンダーがインヴァネスの王城を占領したとき、マッケンジー氏族の領地が荒らされたために、マッケンジー氏族は総攻撃をし、1493年にアレクザンダーは惨敗した。またジョン自身も王軍に降伏し、イール卿位は剝奪され、王権に含まれた。ジョンは、レンフルシャ(Refrewshire)のペイズリー・アビー(Paisley Abby)にて年金で余生を送った。西ハイランドの名門氏族マクドナルドは、ロス伯を失ったばかりではなく、イール卿位⁷⁰も失った。

ジェームズ4世は、有力氏族であったイール卿を押さえたことに自信をつけ、ハイランド地方の氏族を訪れ、新しく州長官を置く交渉をした。徴税権や裁判権などの特権を持って、容易に応じなかった氏族の首長を語学の天才であったジェームズ4世は、ゲール語を使い説得に当たった。これによって、ジェームズ4世はハイランダーの気持ちをつかんだと思われる。その一例であるが、国王直属の官軍を創設したとき、艦隊の最初の艦長を引き受けたサー・アンドリュー・ウッド⁷¹(Sir Andrew Wood)(1515年没)、アンドリュー・バートン⁷²(Andrew Barton)(1466年生-1511年没)、ロバート・バートン⁷³(Robert Barton)(1540年没)などはハイランダーであったことから知ることができる。

第3に、ジェームズ4世の先見性である。ジェームズ4世は、当時のヨーロッパ情勢から海軍力の増強を感じ取り、21門の大砲を装備したマーガレット号に加え、戦艦グレート・マイケル号を建造した。これは、全長約70メートル、300門の大砲を持ち、乗員300人で1,000人の軍隊を移送できた。1506年から4年間の年月をかけて建造したヨーロッパで最大級の軍艦であった。これによって、北の小国というスコットランドのイメージを大きく変えた。

第4に、文化面での治績である。ジェームズ4世は、上で述べ来たように、優れた統

⁷⁰ これ以降、イール卿位は、王権に属し、皇太子の資格となった。現皇太子チャールズは、このイール卿の資格を持っている。

⁷¹ はじめリース(Leith)で商人として活躍していたが、ジェームズ3世の治世では、私掠船(privateer)として許可されていた。後にスコットランド王立海軍(national naval action)と関係を持ち、スコットランド海軍長官(Lord High Admiral of Scotland)になった。1489年までには、戦闘船としてThe Flower号とThe Yellow Cavel号の2船を保有していた。ダンバー(Dunbar)沖でイングランド船を数船拿捕していた。ジェームズ4世は、Andrew Woodを大型船(3, 4本のマストをもち、大西洋を航海したグレート・マイケル号)のGreat Michael号の最初の船長にした。

⁷² 私掠船としてスコットランド王室から認められ、スコットランド王立海軍長官になった。1511年、ジェームズ4世によって、2艘の船(Lionn号とJenny Pirwyn号)でコペンハーゲンに送られ、イングランド高地での戦闘でエドワード・ハウード(Edward Howard)(1476/77年生-1513年没)によって拿捕され、Andrew Bartonは殺害され、その2艘はイングランド海軍に移送された。

⁷³ ロバート・バートンとアンドリュー・バートンは兄弟で、商業船であり私掠船の船長であった。

治能力と並はずれた人間性を持っていた。彼は、果敢ではあったが、信仰心が厚くかつ深く、臣下を冷酷に処刑することはなく、その臣下の能力を最大限に生かす統治を行った。彼は、語学の天才と言われ、音楽、スポーツ、狩猟、金属細工にまで秀でた人物であった。彼は、前王ジェイムズ3世によって開かれたルネッサンスの扉から中に入り、各部屋にスコットランド文化の花を咲かせた。前王が登用した文化人に活躍の場を与えた。文学では、ロバート・ヘンリスンの作品「クレイセイドの遺言 (*Testament of Cresseid*)」、詩人のウィリアム・ダンバー⁷⁴ (William Dunbar) (1460年生?-1520年没?)の作品「あざみとばら (*The Thrissil and the Rois*)」、ガーヴィン・ダグラス⁷⁵ (Gavin/Gawin Douglas) (1474年生-1522年没) や前王の時代から活躍していたブライド・ハリー (Blind Harry) (1440年生-1492年没) がよく知られている。また、1495年には、スコットランド3番目の大学となるアバディーンにキングス・カレッジを創立した。海外にも知られる文学作品の花が咲いた時代は、スコットランド最初の印刷の開始された時期と重なり合う。アンドゥロウ・マイラー⁷⁶ (Andrew Myllar) (1503年-1508年の間活躍) がウォルター・チェプマン (Walter Chepman) (1473年生-1538年没?) の協力を得て、エディンバラでジェイムズ4世からパテントを与えられ、礼拝に関するものや法律本や議会の決議書を印刷し、ブランド・ハリーの *The Wallace* やロバート・

⁷⁴ 東ロージアンに生まれた。彼の名前は、1477年、聖アンドリュースの文学部の名簿(文学士)に、1497年にはその博士の中に見ることができる。聖アンドリュースあるいはエディンバラでフランシスコ会の命によってフランスに行き、ピカルディー (Picardy) で数年送り、1501年に帰国した。

⁷⁵ 東ロージアンのタンタロン城 (Tantallon Castle) で5代アンガス伯アーチボルド・ダグラスの3男として生まれた。1489年から1494年にかけて聖アンドリュースの学生で、その後、パリで教育を受けた、と思われる。1494年には、アバディーンシャ (Aberdeenshire) のモニーマスク (Monymusk) に居住し、後に、リントン (Lynton, 今日の東リントン East Linton) の教区牧師になり、東ロージアンのハウチ (Hauch, 現在の Prentonkik) で修道院長になった。そのして1501年にはエディンバラの聖ジャイル (St Giles) のコレジエイト教会 (Collegiate Church) の長に昇進した。フロドゥンの戦い (Battle of Flodden) でジェイムズ4世 (在位1488年-1513年) が戦死し、その後5代伯アンガスが死ぬと、Gavinの甥の6代アンガス伯アーチボルド・ダグラス (Archibald Douglas, 6th Earl of Angus) (1490年生-1557年没) がその後を後継した。彼は、ジェイムズ4世の未亡人マーガレット・テューダと結婚した。Garvinは、マーガレットの相談相手として活躍した。フロドゥンの戦い以降は、宮廷内のマーガレットを支持したイングランド派とアルバニー公 (Duke of Albany) を支持していたフランス派への分裂に関わり、政治的領域で公務に従事した。1516年、ダンケルド (Dunkeld) の司教に昇進した。

Gavinの文学的な活躍は、1501年から1513年の間に限定されていた。彼の最も重要な作品は、1513年にフロドゥンの戦いの3週間ほど前に出された訳詩 *Eneados* (Virgilの *Aeneid* のスコットランド語訳) であった。彼の作品には、*The Palice of Honour* (1501年) がある。

⁷⁶ アンドゥロウ・マイラーの生い立ちは不明である。彼は、商人であり宮廷人であったウォルター・チェプマン (Walter Chepman) と提携し、スコットランドで初の印刷会社サウスゲイト (Southgait Press) を起こした。Walterがお金を出し、Andrewが専門的技術を提供した。Andrewは、フランスのルーアン (Rouen) で技術 (craft) を身につけた。この会社は、礼拝式用の作品、法律本、ならびに議会の議決書の印刷のためにジェイムズ4世からパテントが与えられていた。

ヘンリスン (Robert Henryson) (1425年生?-1508年没?) とウィリアム・ダンバーの詩集の印刷がその始まりであった。

外交政策の失敗・不手際がジェームズ4世の寿命を短くした。孤立するフランスとの同盟関係の維持がその原因であった。ジェームズ4世がマーガレット・テューダ(Margaret Tudor) (1489年生-1541年没)⁷⁷ と結婚したころ、フランス国王はルイ12世(Lois XII) (在位1498年-1515年)、イングランドの国王が、ヘンリー7世からヘンリー8世⁷⁸ に変わる頃であった。マーガレット・テューダがヘンリー8世の妹であったので、ジェームズ4世はヘンリー8世の義弟であった。ジェームズ4世は、フランスとイングランドを和解させることができるのは、ヘンリー8世の義弟でフランスとの同盟国であるスコットランド王しかいないと真摯に考えた。

フランスは、神聖同盟国からの総攻撃に晒され、ジェームズ4世に応援の要請をしてきた。ヘンリー8世は、ジェームズ4世のフランス出兵制止要請を無視し、1513年にフランスに渡った。サリー伯トマス・ハワード (Thomas Howard, Earl of Surrey) (1443年生-1524年没) 旗下の26,000人のイングランド軍がスコットランドに北進してきた。これに対しジェームズ4世が全土に召集を呼びかけると、多くのハイランド部族(氏族)首長も手勢を連れて駆けつけ、4万人のスコットランド軍が集まった。ジェームズ4世は、コウルドスルーム(Coldstream)でトゥイード川(River Tweed)を渡り、ノーラム(Norham)、フォード(Ford)などの4つの城を落とした。1513年9月、ノーラムの南のプロドゥンにおいて、両軍は決戦した。その結果は、ジェームズ軍の完全な敗北であった⁷⁹。ジェームズ4世は、この戦いで、敗死した。40歳であった。彼の遺体は行方不明になったままである。

⁷⁷ 1502年に結婚したとき、マーガレットは14歳であった。2人の間に、3男2女が生まれるが、3男以外は全て1歳未満で死んだ。マーガレットは、ジェームズ4世が死んだ後、1514年、6代アンガス伯アーチボルド・ダグラスと再婚した。イングランド王エリザベス女王が死んだ後に、イングランド国王に迎え入れられたスコットランド王ジェームズ6世は、母系(メアリー女王)からも父系(ダーリン卿はマーガレットとアンガス伯の孫であった)からもマーガレット・テューダの曾孫であったので、テューダ家の血を継ぐものであった。故に、彼がイングランド王に迎えられた。マーガレット・テューダ王妃は、1541年にパースのメスバエン城で生涯を閉じた。

⁷⁸ 彼は、ヘンリー7世の播いた新しい王政の種を育てた国王であった。ヘンリー8世は、ラテン語、フランス語、そしてスペイン語に通じ、1521年には、マルティン・ルター(Martin Luther) (1483年生-1546年没)を批判する著作「Assertio Septem Sacramentorum」を発表し、法皇レオ10世から信仰の擁護者の賛辞を受けた。人文主義者エラスムス(Desiderius Erasmus) (1466年生-1536年没)は、ヘンリー8世を高く評価した。

⁷⁹ スコットランド軍の死者は1万人以上、その中には、伯卿、氏族の首長、聖職者もいた。スコットランド軍の大敗の原因は、野戦の戦闘方法に通じない寄せ集めの軍隊であったことであった。よく組織され、野戦向きの武装をしたイングランドの軍隊に圧倒された。ジェームズ4世の大砲も野戦向きではなかった。それ対しイングランド軍の長槍は野戦向きであった。

2.5 スコットランド、イングランドおよびフランスの3角関係

ジェームズ4世の後を継いだ3男ジェームズは、ジェームズ5世(James V) (在位1513年-1542年)として即位した。そのとき彼は1歳と5か月であった。スコットランドの伝統となった彼の摂政役による統治が再開された。摂政政治は、国政の不安の種であり、また有力貴族間の争いの温床でもあった。最初の摂政役には王母マーガレットが就いた。彼女は国政に全く不向きであったので、ジェームズ2世の孫で親英派であった初代アラン伯ジェームズ・ハミルトン(James Hamilton, 1st Earl of Arran) (1477年生?-1529年没)と、親仏派のヒューム卿アレクザンダー・ヒューム(Alexander Home, 3rd Lord Home) (1516年没)やジェームズ・ビートン⁸⁰(James Beaton, Archbishop of Saint Andrews) (1472年生-1539年没)が彼女の補佐役についた。

摂政政治の不安定さは、摂政役の王母マーガレットが、親英派の6代アンガス伯アーチボルド・ダグラス(Archibald Douglas, 6th Earl of Angus) (1489年生?-1577年没)と再婚⁸¹したによって顕在化した。数少ない有力貴族の中でも親英派の6代アンガス伯と未亡人マーガレット王妃の結婚には反対した摂政役を補佐していた重臣達は、彼女を摂政役から排除し、その代わりに、フランスから呼び寄せた2代オルバニー公ジョン⁸²(John Stewart, 2nd Duke of Albany) (1481/1484年生-1536年没)を摂政にし、その王制の不安定さを凌ごうとした。

次の摂政役であった2代オルバニー公は、ジェームズ5世の王母マーガレットにスコットランドからの退去⁸³を命じた。オルバニー公は、この采配で摂政としての人気を博し、議会によって王国第2の人物として宣言され、王位継承の第1位者に公認された。しかし、彼は、

⁸⁰ 彼は、デイヴィッド・ビートン(David Beaton, Archbishop of Saint Andrews) (1494年生-1546年没)のおじであった。彼は、1505年に大蔵大臣(Lord High Treasurer of Scotland)、1508年にギャロウェイの司教に選任され、1515年、大法官になった。1522年、聖アンドリュースの大司教になった。彼は、司教として、ヘンリー8世のスコットランドを支配下に入れようする隠謀を阻止するために、その全勢力を投入した。彼は、パトリック・ハミルトン(Patrick Hamilton) (1504年生-1528年没)と異端者を聖アンドリュースにおいて火あぶりの刑に処した。

彼は、ジェームズ5世の絶大な信望を獲得していたが、2代オルバニー公ジョン・ステュワートの嫉妬のために国璽尚書を解任された。

⁸¹ ジェームズ4世の死後、1年も経たない内に、1514年に6代アンガス伯アーチボルド・ダグラスと再婚し、1515年にハーボトゥル城で娘マーガレットを出産した。このマーガレットと4代レノックス伯マッシュ・ステュワートとの間に生まれたのがダーンリー卿ヘンリーである。このヘンリーとスコットランドのメアリー王妃の間に生まれたのがジェームズ6世であった。

⁸² 彼は、初代オルバニー公アレクザンダーとアンヌ・ドゥ・ラ・トゥールの間に生まれた。オルバニー公アレクザンダーは、ジェームズ2世の次男として生まれ、ジェームズ3世の弟であった。彼には、スコットランド王位の継承権があった。

⁸³ 彼女は、ノーサンバーランドのハーボトゥル城に移った。王母マーガレット追放の彼の決断は、深い政治判断によるものではなく、単に彼がスコットランドとイングランドの関係を深く理解していないことやフランス語しか話さないことによっていた。

王母マーガレットの補佐役であったヒューム卿などの不穏分子を処刑し、1517年にフランスに一時帰国し、それから4年間もスコットランドを留守した。このことは、摂政オルバニー公のスコットランド現状に関する認識が浅かった⁸⁴ことを意味している。他方、オルバニー公は、スコットランド摂政としてフランス王フランソワ1世⁸⁵(François I)(在位1515年-1547年)との間で、1517年に「古い同盟」を再確認するルーアン条約(Treaty of Rouen)を結んだ。フランソワ1世は、依然として列強から孤立して、その2年前にミラノ⁸⁶を押さえ、ハプスブルグ家(The House of Habsburg)と神聖ローマ皇帝の帝位を争う⁸⁷気概を抱いていたので、スコットランドとの同盟を確認する必要があった。

彼は、スコットランドとの古い同盟を強化することによってハプスブルグ家と手を握っていたヘンリー8世を牽制することを考えていたのかも知れない。2代オルバニー公の狙いは、スコットランドのためではなく、強国のフランス王国に取り入れることであった。

スコットランドにおいて6代アンガス伯がヘンリー8世と陰謀を企む状況になったので、1521年に2代オルバニー公は、急いでスコットランドに戻った。6代アンガス伯の陰謀は失敗したが、王母マーガレットは、兄のイングランド王ヘンリー8世と組むアンガス伯と対立し、ハーボトゥル城を出て、オルバニー公の側に擦り寄った。フランスとの間で確認された

⁸⁴ オルバニー公がスコットランドを留守にしている間、ダグラス伯一族とハミルトン一族によるエディンバラ市内での市街戦が起こった。1520年のこの争いは、「コズズウェイの掃除」と呼ばれ、親英派ダグラス一族の親仏派のハミルトン一族に対する圧勝に終わった。スコットランドは全体として親英的になった。

⁸⁵ ブルターニュ公フランソワ1世(François I, Duke of Bretagne)(1494年生-1547年没)は、幼少のころ人文学者の教育を受け、即位後、レオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci)(1452年生-1519年没)やロッソ・フィオレンティーノ(Rosso Fiorentino)(1495年生-1540年没)らを保護した。またコレージュ・ド・フランスを設立し、ヘブライ語、古代ギリシャ語、数学の研究を促進させた。ルイ12世(Lois XII)(在位1498年-1515年)に世継ぎがいなかったため、その大甥のフランソワが王位を後継し、フランソワ1世として王位に就いた。フランソワが王太子のころルイ12世と王妃アンヌとの間に生まれた又従姉妹のクロードと結婚して、ブルターニュ公となり、1532年にブルターニュ公国をフランスに併合した。

⁸⁶ 1500年にフランス王ルイ12世は、スフォルツァ家(The House of Sforza)のイル・モーロを幽閉し、ミラノ公国を征服した。だが、フランスのイタリア介入を嫌うローマ教皇は、神聖同盟を形成し、1513年、フランスをミラノから追放した。スフォルツァ家が復帰した。1515年、フランソワ1世は、ミラノを侵攻し、スフォルツァ家を追放し、ミラノを支配した。

⁸⁷ フランソワ1世は、皇帝マクシミリアン1世(Maximilian I)(在位1493年-1519年)の死後、1519年にスペイン王カルロス1世(Carlos I)(在位1516年-1556年)と神聖ローマ帝国の帝位を争い、惨敗した。カルロス1世は、神聖ローマ帝国の皇帝カール5世(Karl V)(在位1516年-1556年)として帝位に就いた。これによって、フランスはハプスブルク家スペインとハプスブルク家ドイツに挿まれた。フランソワ1世とカール5世の覇権争いは延々と続いた。フランソワ1世は、ハプスブルク家の包囲網を避けるための活路をイタリア侵攻に見いだしていた。フランソワ1世は、1521年から1544年にかけて、イタリアを巡って皇帝カール5世と争った。これは、第1次イタリア戦争(1521年-1526年)、第2次イタリア戦争(1526年-1529年)、第3次イタリア戦争(1536年-1539年)、そして第4次イタリア戦争(1542年-1544年)として知られている。

同盟を具体化するために、1522年と1523年の2回に亘って、フランス部隊の応援を得て、スコットランド軍はイングランド領を侵攻した。しかし、スコットランド軍は、イングランドとの国境にさしかかると、進軍を止めた。というのは、スコットランド軍がその戦いをスコットランドのためではなくフランスのための戦いである、と感じたからであった。1524年に2代オルバニー公は、フランス軍を帰し、自身もフランスに行ったまま、再びスコットランドには戻らなかった。

2代オルバニー公は、スコットランドを去ったが、スコットランドの摂政政治の不安定さはなおも続いた。その後、親仏派であった初代アラン伯ジェームズ・ハミルトン(James Hamilton, 1st Earl of Arran) (1457年生-1529年没)が、王母マーガレットを取り込み、ジェームズ5世をスターリング城からエディンバラ城に移し、政治的な主導権をとった。1525年に、6代アングス伯アーチボルド・ダグラス(Archibald Douglas, 6th Earl of Angus) (1490年生-1557年没)は、アラン伯と同調して、ヘンリー8世の了解の下、ジェームズ5世を取り込みフォークランド宮殿に軟禁し、ダグラス派による政権を樹立した⁸⁸。

ジェームズ5世も成長し、親政に乗り出し、ジェームズ4世によって確立された王権の維持に躍起になった。1528年にジェームズ5世は、6代アングス伯の手を逃れて、スターリング城に落ち着いた。最初にジェームズ5世の内政面から彼の王としての手腕を見てみよう。スターリング城で直ちに親政に乗り出し、議会を招集し、6代アングス伯一族の処刑と伯領の没収⁸⁹を議決し、6代アングス伯を追い出した後、イングランドと休戦条約を結び、南の安泰を確保し、西部あるいは北部の地方氏族との関係強化の政策を推進した。

父王ジェームズ4世と同様に全国を駆けめぐり、身分の低いもの貧しいものに気を配り、国民からの人気⁹⁰を博した。この全国を駆けめぐる点では父王ジェームズ4世の気質を継いで

⁸⁸ このことによってアングス伯とマーガレット・テューダの不仲は決定的になり、1527年にマーガレット・テューダは、アングス伯と離婚し、翌年、初代メスヴァン卿ヘンリー・ステュワート(Henry Stewart, 1st Lord of Methven) (1495年生-1552年没)と再婚した。

⁸⁹ 6代アングス伯は、1529年イングランドに去り、ジェームズ5世の治世の間、スコットランドには戻らなかった。

⁹⁰ その人気を利用して、ジェームズ5世は、父王と同様に、全国視察では地方のおぼこ娘に次々と手を出したが、彼の女性好みは田舎の貧しい娘には限らなかった。アースキン家(Erskine House)のマーガレット(Margaret Erskine) (ロッドホーリーヴンのロバート・ダグラスの妻)、エルフィンスタン家(Elphinstone House)、ビートン家(Beaton House)の娘たちもジェームズ5世の後宮に加えられた。

ジェームズ5世には9人の非嫡出子がいた。その男子の多くは、修士などの聖職者になり、独身生活を誓った。3代レノックス伯ジョン・ステュワートの娘(エリザベス・ステュワート)との間にアダム・ステュワート(Adam Stewart) (1606年没)、エリザベス・ベスヌー(Elizabeth Bethune)の娘との間にジャン・ステュワート(Jean Stewart) (1588年没)、エリザベス・ショウ(Elizabeth Shaw)との間にジェームズ・ステュワート(James Stewart) (1529年生-1559年没)、ユーフィンヌー・エルフィンスタンとの間に、ホーリールド宮修道院次長になった初代オークニ伯ロバート・ステュワート(Robert

いたが、前王の寛容さは継いではいなかった。彼は、他の中世の国王と同じように、強権を発動した。たとえば、国王に反抗し反乱を起こしていたアームストロング一族(Clan Armstrong)とカーレンリグ(Carlenrig)で会合をもつために安全な交通証書を発行したが、ジェームズ5世は、イングランドとの境界の部族を鎮める策略をもっていた。ジェームズ5世は、ジョン・アームストロング(John Armstrong)(生没不詳)とその連隊を謀反の故に捕らえ、ジョンを首吊りに処した。また4代アーガイル伯コリン・キャンベル⁹¹(Colin Campbell, 4th Earl of Argyll)(1507年生?-1558年没)を嫌い、彼の死後、同家世襲のシェリフの職位を取り上げた。

ジェームズ5世は、その外交政策と宗教政策では、カソリックを選び、フランスとの同盟を強化した。彼は、フランソワ1世の娘マドレーヌ・ドゥ・ヴァロア(Marie de Valois)(1520年生-1537年没)と結婚した⁹²。彼が多くの妃候補者⁹³の中からフランソワ1世の娘を選んだのは、第1に、フランスとの「古い同盟」、第2に、宗教問題であった。ジェームズ5世は、カソリック国であったフランスを選んだ、と推測される。大陸では、ルターに端を発する新しい信仰が広まりつつあった。スコットランドは、ヨーロッパ大陸ほどには新教の強い影響を受けてはいなかったが、ヘンリー8世のイングランド発の新教の影響を受ける恐れがあっ

Stewart, 1st Earl of Orkney)(1533年生-1593年没)、エリザベス・カーミハエ(Elizabeth Carmicheal)との間に初代ダーンリー卿ジョン・ステュワート(John Stewart, 1st Lord of Darnley)(1531年生-1563年没)、そしてマーガレット・アースキンとの間には、幼くして修道院次長を経験していた初代マリ伯ジェームズ・ステュワート(James Stewart, 1st Earl of Moray)(1531年生-1570年没)などの庶子が生まれた。このマリ伯は、ジェームズ6世の摂政になるなどステュワート王家では中心的な役割を果たした。

⁹¹ 彼は、ハイランド地域での反乱に対して軍事行動をとり、ジェームズ5世の宮廷に加わり、国境地域の監督の長官になった。彼は、1528年に首席裁判官(Lord Justice General)になった3代キャンベル伯アーチボルド・キャンベル(Colin Campbell, 3rd Earl of Argyll)(1488年生-1529年没)と、3代ハントレー伯アレグザンダー・ゴードン(Alexander Gordon, 3rd Earl of Huntley)(1524年没)の長女ジャン・ゴードン(生没不詳)との間に生まれた長男であった。彼は、ジェームズ5世とその枢密院からスコットランドの島々での暴動について嫌疑を懸けられ、国王の前に引き出され、投獄された。しかし、ジェームズ5世が死んだ後、解放され、元の職に戻った。

⁹² 2人は1537年にパリのノートルダム聖堂で挙式した。しかし、半年後にマドレーヌはホリールードハウスで病没した。1538年にジェームズ5世は、フランソワ1世の重臣であったギーズ公クロード・ドゥ・ロレーヌ(Claude de Lorraine, duc de Guise)(1496年生-1550年没)とアンカネット・ドゥ・ブルボン(Antoinette de Bourbon)の娘のマリー・ドゥ・ロレーヌ(Marie de Lorraine)(1515年生-1560年没)と再婚した。

⁹³ イングランド王ヘンリー8世は、最初の王妃キャサリン・オブ・アラゴン(Catherine of Aragon)(1485年生-1536年没)との間の娘メアリーを押しつけてきた。神聖ローマ皇帝カール5世は、妹のカトリナ・デ・オーストリア(Catalina de Austria)(1507年生-1578年没)(後にポルトガル王ジョアン3世(João III)(在位1521年-1557年)の王妃)を押しつけ、法皇クレメンス7世は、姪のカテリーナ・デ・メディチ(Caterina di Lorenzo de' Medici)(1519年生-1589年没)(後にフランス王アンリ2世妃)を持ちかけた。

た⁹⁴。

ジェームズ 5 世の命を奪ったのは、ジェームズ 4 世と同様に、外交政策であった。フランスとの「古い同盟」の破棄を執拗に迫ったヘンリー 8 世は、スコットランドに同盟関係を申し入れた⁹⁵。その申し入れはフランスとの同盟の破棄を強要するものであるという重臣の忠告を聞き入れ、ジェームズ 5 世は、ヘンリー 8 世との会談を拒否した。それに激怒したヘンリー 8 世は、フロドゥン (Flodden) の戦いの勝者トマス・ハワードの息子ノーフォーク公トマス (Thomas Howard, 3rd Duke of Norfolk) (1473 年生-1554 年没) に出撃を命じ、国境のロクスバラ (Roxburgh), ケルソー (Kelso) を焼き払らわせた。これに対し、ジェームズ 5 世は、軍を召集し南進した。その軍が、エディンバラの南東のファラ・ムア (Fala Moor) に差し掛かると、兵隊は南進を拒否した。そのことにジェームズ 5 世は、大変に落胆し、陰鬱な空気の中で、その年を越した。その翌年の 1541 年には、聖アンドリューズ大司教のデイヴィッド・ビートン (David Beaton, Archbishop of Saint Andrews) (1494 年生-1546 年没) らの高僧が、軍資金を集め、徴兵の他に傭兵を集め、軍政を整えた。そして 1542 年 11 月に、ジェームズ 5 世は、その軍勢を先頭に南進し、ダムフリースシャーのロッホメイバン (Lochmaben) に到達した。ジェームズ 5 世は、皆に残り、信頼できる反英・反プロテスタントの武将オリヴァー・シンクレア (Oliver Sinclair) (1560 年没?) が総指揮する部隊に国境越えを命じた。しかし、シンクレアの部隊は、イングランド軍の罠にかかり、沼沢地のソルウェイ・モス (Solway

⁹⁴ ヘンリー 8 世は、王妃キャサリン・オブ・アラゴンと離婚し、アン・ブーリン (Anne Boleyn) (1501 年生-1536 年没) との再婚を目論むが、ローマ法王に認められなかった。ヘンリー 8 世は、兄アーサーの未亡人であったキャサリン・アラゴンと婚約した。当時、兄嫁と結婚することは近親相姦と考えられていたので、法皇ユリウス 2 世に願い出て、1504 年に特免状の発布を受け、1505 年に正式に婚約した。1509 年にヘンリー 8 世とキャサリンは結婚した。ヘンリーが 18 歳で、キャサリンが 24 歳であった。2 人の間に 6 人の女子は産まれるが、後にメアリー 1 世となる子だけが生長した。しかし、世継ぎの男子は生まれなかった。1533 年に、ヘンリー 8 世はキャサリン・アラゴンと離婚し、アン・ブーリンと再婚した。この再婚には反対者がいた。法皇の特免状を介した結婚で、その上キャサリン・アラゴンは神聖ローマ帝国の皇帝カール 5 世の叔母であったので、カール 5 世は法皇クレメンス 7 世 (Clemens VII) (在位 1523 年-1534 年) に圧力をかけ、結婚を阻止しようとした。その交渉役に大法官トマス・ウールジ (Thomas Wolsey) (1471 年生-1530 年没) をヘンリー 8 世は当てたが、彼はその交渉に困難を極めた。最終的には、カンタベリー大司教のトマス・クラインマー (Thomas Cranmer) (1489 年生-1556 年没) に指図して、キャサリンとの結婚が無効であったとの裁定を出させ、キャサリン・アングラの侍女であったアン・ブーリンとの結婚を成立させた。ヘンリー 8 世は、カンタベリー大司教トマス・クラインマーに結婚の無効のお墨付きを出させ、新しい宗旨こそ出していないが、ルターと同様にローマに楯突くものであった。ジェームズ 5 世は、自身がカソリックを強く信仰していたことから、ヘンリー 8 世のローマとの断絶が新教に至ると判断し、フランスから王妃を迎えたとと思われる。

⁹⁵ ジェームズ 5 世と王妃マリー・ドゥ・ロレーヌとの間に生まれた長男ジェームズと次男アーサーが同時に死ぬという不幸に見舞われていたとき、ヘンリー 8 世は、その悲しみにつけ込み、ローマから断絶し、彼の孤立の道連れにスコットランドも引きずり込もうとして、ヨークでの会談を持ち出し、ジェームズ 5 世からの返事を待たずに、ヨークに向かった。

Moss)に引きずり込まれ、各隊の指揮官は戦わずして投降する有様で、シンクレア自身もイングランド軍の捕虜になった。

ジェイムズ5世は、ロソホメイバンからフォークランド宮殿に帰り、悲痛のあまり、そのまま寝ついた。その一週間後に、ジェイムズ5世は、王妃マリー・ドゥ・ロレーヌが女の子を産んだとの知らせを受け取ったが、それから6日後の12月14日に、その30年の生涯を閉じた⁹⁶。ジェイムズ5世の死後直ちに、生後6日のメアリー(Mary Stewart) (在位1542年-1567年)がスコットランド国王として即位⁹⁷した。スコットランド王国は、アルピン家の最後のマーガレット女王と同じように、またもや嬰兒女王による船出となった。メアリー女王が生長するまで、摂政役が必要であった。最初に、ジェイムズ2世の曾孫で、プロテスタントの親英派であった2代アラン伯ジェイムズ・ハミルトン(James Hamilton, Duc de Châtellerauld, 2nd Earl of Arran) (1516年生?-1575年没)が摂政役に就いた⁹⁸。メアリー女王は、ステュワート王家の最初で最後の女王であった。

ジェイムズ4世死後、スコットランド(スコットランド国王)は、ヨーロッパ大陸の旧教と新教の対立から生じた社会的騒乱あるいはイングランドとフランスの領土争奪戦に関わり、その王権にも陰りが見え始めた。ジェイムズ5世やメアリー女王は、フランス国王フランソワ1世ならびにイングランド国王ヘンリー7世(Henry VII) (在位1485年-1509年)やヘンリー8世(Henry VIII) (在位1509年-1547年)の大国主義に苦しめられ、さらに国内の宗教的対立から生じた社会の混乱の制圧に翻弄された。ジェイムズ6世になり、スコットランドはイングランドとの連合の路線を選択し、新たな王国(君主国)の成立へと向かい、新たな王制の確立を目指し、ジェイムズ1世(James I) (在位1603年-1625年)、チャールズ1世(Charles I) (在位1626年-1649年)、チャールズ2世(Charles II) (在位1661年-1685年)、そしてジェイムズ2世(James II) (在位1685年-1688年)の王制が展開された。その結果、スコットランドでは、王権も議会の力に圧され、議会の下での王制(立憲君主制)の道を選び、主権は王権から国民主権(市民権)に変遷することとなった。近代国家は、一人の王で

⁹⁶ ジェイムズ5世の治績の第1は、民事の中央裁判所である College of Justice をエディンバラに設けたことであった。これは、現在のスコットランドの最高民事裁判所である court of session に繋がっている。その第2は、王国の財政を巧く遣り繰りして、教会の収入を王国の特別プロジェクトに使い、ホリールードハウス、リンリスゴウ宮殿、フォークランド宮殿の改築に当てたことであった。それは当時のルネッサンス建築の中でも優れたものをであった。スターリング・ヘッドと呼ばれる木彫の天井飾りは、現存するスコットランド・ルネッサンス調の最高の木彫である。ジェイムズ5世の文化面での治績である。

⁹⁷ メアリーの戴冠式は、1543年9月9日に執り行われた。即位と戴冠が異なったのは、王母マリー・ドゥ・ロレーヌとアラン伯の間の確執があったことによる。王母マリー・ドゥ・ロレーヌと2代アラン伯の確執は、王女メアリーへのイングランドとフランスからの結婚申し込みにも現れていた。

⁹⁸ ハミルトンは1542年から1554年まで摂政職にあった。その後、1554年から1560年までは王母マリー・ドゥ・ロレーヌが摂政職にあった。その後はメアリー王女が親政を執った。

統制するには、大きくなりすぎている。

第3節 スチュワート王朝に拘ったジャコバイト

3.1 共同君主からグレートブリテン王国

無血で終わったジェームズ2世の失脚とウィリアム3世とメアリー2世の王位継承⁹⁹は、無血革命（名誉革命）と呼ばれた。1689年1月に開かれたイングランド議会は、国王不在の下で、ウィリアム3世¹⁰⁰とメアリー2世の「共同君臨」を承認した。イングランドでは、ウィリアム（イングランド王ウィリアム3世）の即位は認められたが、スコットランドにはジェームズ2世（スコットランド王ジェームズ6世）の絶対的支持者も多数いて、カルヴィン主義に由来する長老会制度を強力に後押しするウィリアム（スコットランド王ウィリアム2世）を国王として認めることに反対するものもいた。一方で、長老会は、ウィリアムが司教制度を排除して、完全な長老会制を認めることをウィリアムに突きつけた。イングランドがウィリアムを認めた半年後の1689年中頃に、ウィリアムはスコットランド国王のウィリアム2世として承認された¹⁰¹。

⁹⁹ 実際には、イングランドでは、ジェームズ2世の脱出後の方針は確定していなかった。王位が空位になったのか、あるいはジェームズ2世が退位になったのかは確定していなかった。もしジェームズ2世が退位したのであれば、その娘メアリーが継承するのか、それとも、その夫ウィリアムはどうなるのかも確定していなかった。誰がどのように王位を継承するのかについての方針が定まっていなかった。しかし、ウィリアムは、単なる女王の夫としてイングランドにと止まることには不満であった。ウィリアムは軍勢を引き連れて帰国する意思を示した。

¹⁰⁰ 1650年にナッソ伯オレンジ公ウィリアム3世は、オレンジ公ヴィレム2世とチャールズ2世の長女メアリー・ヘンリエッタ（ジェームズ2世の姉）との間の一人息子として、ヘイグに生まれた。ウィリアム3世は、27歳の時に、ジェームズ2世の娘メアリーと結婚した。ジェームズ2世の甥であった。ジェームズ2世はウィリアムの義父であった。ウィリアム3世は、カルヴィン派のプロテスタントであった。

1672年にフランス王ルイ14世がオランダを侵攻し、オランダ戦争が起り、フランスがオランダの大半を制圧し、政治指導者デ・ウィッチが暴徒によって殺害され、危機に瀕したネーデルランド連邦共和国（The Republic of the Seven United Netherlands）（オランダ共和国）ではオラニエ＝ナッソ家の統領（総督）職を復帰させた。ナッソ伯オレンジ公ウィリアム3世を統領にすると、オーストリア、スペインと同盟を結び、フランスを包囲し、堤防決壊戦術によってフランスを撃退し、撤退させた。一方、イングランド議会は、ネーデルランド連邦共和国がフランスの手に落ちると、イングランドがフランス重商主義によって経済的に制圧されると判断し、イングランド王チャールズ2世に親仏路線の撤回を求めた。そのため、1677年にチャールズ2世は王弟ジェームズの娘メアリー（後のメアリー2世）をウィリアム3世に嫁がせ、同盟を結び、国内の不安を沈静化させた。1689年にウィリアム3世は、オレンジ公ウィレム3世としてネーデルランド連邦共和国の統領（総督）に就き、同時にグレートブリテン王国の王にも就任した。オレンジ公ウィリアム3世は、イングランドおよびスコットランド王国の「共同君主」としてイングランドに来た。オレンジ公ウィリアム3世は、ネーデルランド連邦共和国の総督であり、君主ではなかったが、ネーデルランドとグレートブリテン王国の「同君連合」であったと見ることもできる。

¹⁰¹ ジェームズ2世廃位後、ウィリアム3世がイングランド王として正式に国会の承認を受けたのが1689年1月であったのに対し、スコットランドがウィリアム3世を国王として承認したのが半年後の6月であっ

1689年4月にウィリアム3世(William III) (在位1689年-1703年)とメアリー2世(Mary II) (在位1689年-1694年)は、夫婦ともども、その同君連合王国の王に君臨する戴冠式を挙行した。1689年1月に開催された議会において、国王不在のもとで、国民の権利を謳った「権利宣言」(The Declaration of Rights)¹⁰²が採択され、またその宣言をウィリアムとメアリーの2人が承認することを条件に、その即位が承認された。2人の即位後にウィリアム3世は、その権利宣言を正式にした「権利章典」(The Bills of Rights)として成立させ、「君臨すれども統治せず」の英国君主制の伝統的政治形態の基礎を築き、議会を尊重した。

またウィリアム3世は「王位継承令」(The Act of Succession)を發布した。ジェームズ2世の王位を継ぐ第1順位は、皇太子のジェームズ・フランシス・エドワード(James Francis Edward)であった。しかし、メアリーとウィリアムが王位に就いた。ジェームズ2世とジェームズ・フランシス・エドワードを廃位することについて議会の承認を得たとはいえ、2人が王位に就くことは一種の革命であり、正当な王位継承ではなかった、と解釈できる。メアリー2世が1694年に崩御したとき、彼女とウィリアム3世との間には嗣子(王位継承者)がいなく、また王位継承者であったアン王女の1人息子グロスター公ウィリアムはすでに10歳で他界していた。アン死後の王位継承者を巡る紛糾が予想されたので、1701年にウィリアム3世は「王位継承令」を發布した。その令では、イングランド王位継承者をステュワート王家の血筋を引くプロテスタントに限った。その令によると、アン女王の後の王位継承者は、ジェームズ6世の長女エリザベス(Elizabeth)の娘とハノーヴァー選定侯妃ゾフィアであった。この王位継承令の実効性を高めるには、スコットランドの同意を取り付ける必要があった。というのは、ハノーヴァー選定侯が王位を継承すると、スコットランドのステュワート王家の血筋が絶えるので、スコットランドはその王位継承令に反対する、と考えられたからであった。実際、ジェームズ7世の信奉者であるジャコバイトは、ジェームズ2世の長男ジェームズ・フランシス・エドワード・ステュワート(James Francis Edward Stewart)(1688年生-1766年没)を同君連合王国の王位継承者に擁立しようとしていた。それにも拘わらず、

た。これは両国が別国であったことを意味していた。スコットランドでは、ジェームズ2世(スコットランド王ジェームズ7世)に対する支持の気風が強く残っていた。ハノーヴァー王朝の時代にあつてさえ、ジャコバイトは、ジェームズ2世の孫プリンス・チャーリーを支持した。

¹⁰² この宣言では、ジェームズの失政と退位、イングランド臣民の権利と自由が主張された。例えば、臣民の請願権、議会の代表を選ぶ権利、公明で慈悲深い裁判を受ける権利、両院での自由な討議権、全新教徒に対する信仰の自由の保証を要求した。ジェームズが国教教務委員会を作ったこと、議会の許可なく軍を募ったことを不法であるとした。新君主に新教の自由と国の法と自由とを維持することを約束することを求め、オレンジ公とメアリー夫妻にイングランドの王と女王にすることを宣言して結んでいる。2人に聖職者、貴族、庶民のイングランド3階級の名の下において、王冠を受けることを要求した。2人は、法を守り、議会の勧告に従って統治することを宣言した。

何の混乱もなく、アン女王（在位 1702 年-1714 年）への王位継承、そしてハノーヴァー王家への王位の継承を達成し得たのは、その「王位継承令」に拠っていた。

イングランド王国はスコットランド王国との連合を推進した¹⁰³。それは、単に王位継承の問題を解決するためだけではなく、その他の多くの懸案事項も連合王国の議会在議することを目論んでの連合推進であった。一方、スコットランドでは、イングランド王国の連合王国推進の目的はその乗っ取り以外の何ものではないと判断し警戒していた。1706 年にロンドンにて両国の 31 人の代表が連合会議を開き、スコットランドの教会組織、裁判、司法制度はそのままとし、各都市の特権を引き続き認めることを条件に、スコットランド議会を閉じ、イングランド議会与合同することと、ハノーヴァー家への王位の継承が合意された。翌年の 1707 年 5 月 1 日に「連合法」(The Act of Union) が施行され、イングランド王国とスコットランド王国を合わせた「グレートブリテン王国」が成立した。

しかし、スコットランドではステュアート王家による王制に拘る動きが繰り返された。18 世紀の前半、スコットランドとイングランドの連合王国の政治体制を動揺させる反革命的な勢力（ジャコバイト）が形成された。ステュアート王家のジェームズ 2 世とその正嫡をイングランド王位（グレートブリテン王国）に復位させるための政治的・軍事的な行動を繰り返した人々が居た。彼らは、ジャコバイト¹⁰⁴と呼ばれている。イングランドのジャコバイトには、トーリー党の人たちが多く、ホイッグ党のサー・ロバート・ウォルポール（Sir Robert Walpole）（1676 年生-1745 年没）は、「ジャコバイトは危険分子である」というキャンペーンを展開し、公然とジャコバイトを名乗ることを抑えた。スコットランドのジャコバイトの基盤はハイランド地方であった。1707 年のイングランド議会和スコットランド議会和合同する連合法（合同法）の成立によって、両王国の歴史的・宗教的対立の問題を先送りし、両王国の経済的・軍事的利益を優先させたが、しかし、スコットランドではイングランドとの差別的な取り扱いに不満を懐いていた。

3.2 ハノーヴァー王家の成立とジャコバイト：ジョージ 1 世の政策とジャコバイト

1714 年 8 月 1 日にアン女王(Queen Anne)（在位 1702 年-1714 年）¹⁰⁵ が逝去すると、ハノー

¹⁰³ イングランドの賄賂工作が展開された。有力貴族に対する賄賂であった。2 代アーガイル公ジョン・キャンベル（John Campbell, 2nd Duke of Argyll）（1678 年生-1743 年没）に対する賄賂のみならず、また 1705 年に彼にイングランド貴族のグリニッジ伯位を叙爵した。クイーンズバリ公ジェームズ・ダグラス（James Douglas, Duke of Queensberry）（1662 年生-1711 年没）、グラスゴウ伯デイヴィッド・ボイル（David Boyd, 1st Earl of Glasgow）（1666 年生-1733 年没）も賄賂を受けて、1706 年にロンドンの会議に代表として参加した。

¹⁰⁴ ジャコバイトの語源はジェームズのラテン語名 Jacobus である。

¹⁰⁵ 1702 年 3 月から 1707 年 5 月まではイングランド、スコットランド、アイルランド王国の女王であった。

ヴァー選帝侯ジョージ・ルイス¹⁰⁶ (George Louis) (ドイツ名ゲオルク・ルードヴィッヒ (Georg Ludwig)) がグレートブリテン王ジョージ1世 (在位1714年-1727年)¹⁰⁷ として王位を継承し即位した。ハノーヴァー王朝(ジョージ1世からヴィクトリア女王まで: 1714年から1901年)が成立し、同時に王位継承においてステュワート王家の血筋が絶えた。これによって、「グレートブリテン王国」の王家は、同君連合時代のステュワート王家から、新たな王家としてハノーヴァー王家 (The House of Hanover) に替わった。ステュワート王家 (メアリー女王以降はスチュアート王家と呼ばれる) の治世は、ロバート2世 (在位1371年-1390年) からアン女王までの343年間であった¹⁰⁸。ハノーヴァー家の王たちは、グレートブリテン王国の国民によって「ドイツ人の王」と呼ばれた。

ハノーヴァー王家のゲオルク・ルードヴィッヒがグレートブリテン王国の王位を継承したのは、彼の祖母エリザベス (Elizabeth of Stuart) (1596年生-1662年没) がステュワート王家に繋がっていたことによった。エリザベスは、ジェイムズ1世 (スコットランド王ジェイムズ6世) (在位1567年-1625年) の長女であり、その娘ゾフィア¹⁰⁹ (Sophia Duchess of Brunswick-Luneburg) (1714年没) は、ハノーヴァー選帝侯 (Electress of Hanover) ゲオルク・ルードヴィッヒの妃であり、1701年のイングランド王位継承令発布以後、アン女王を除くと、ステュワート王家の血筋で唯一のプロテスタントであった。彼女は、アン女王より3か月先に他界したので、ゾフィアの長男ジョージ・ルイス (ゲオルグ・ルードヴィッヒ) がグレートブリテン王国の王位 (イングランド王位) を継承した。ゲオルグ・ルードヴィッヒはジェイムズ1世の曾孫であった。

1707年5月から1714年8月まではグレートブリテン王国の女王であり、アイルランド王国の女王であった。アン女王は、イングランド王ウィリアム3世およびアイルランド王のウィリアム2世を継承し、王位に就いた。1707年の合同法のもとで、スコットランドとイングランドは、1つの君主国に合同され、アン女王は、グレートブリテン王国の初代君主であった。そして、同時に、アイルランド女王であり、フランス女王の資格を持っていた。

¹⁰⁶ ゲオルク・ルードヴィヒは、1698年にハノーヴァー選帝侯を継承し、ドイツ領邦国家の君主になった。ジョージ1世の父エルネスト・アウグスト (1629年生-1698年没) がハノーヴァー選帝侯に選ばれたのは、1692年であった。エルネストを選帝侯に推したのは、ヨーロッパの勢力均衡を狙っていたグレートブリテン王ウィリアム3世であった。エルネストがハノーヴァー選帝侯に選ばれたのは、イングランド王ジェイムズ1世の娘エリザベスの娘ゾフィアを妻にしていたからであった。選帝侯にはドイツ皇帝を選ぶ権利があった。

¹⁰⁷ ジョージ1世はステュワート王家 (スチュアート王家) の血を引くが、母方の祖母エリザベスがジェイムズ1世 (ジェイムズ6世) の娘であって、彼は、ジェイムズ2世から5親等離れていた。

¹⁰⁸ しかし、イングランド王ジェイムズ3世であり、スコットランド王ジェイムズ8世であったステュワート王家の末裔はフランスで生き残っていた。イングランドやスコットランドでは、ジャコバイトとして政治的・軍事的運動を展開し、グレートブリテン王国の政府と対抗した。

¹⁰⁹ ゾフィアの父は、ファルツ選帝侯フリードリヒ5世 (Friedrich V) (在位1610年-1632年) で、母はイングランド王ジェイムズ1世の娘エリザベスであった。ジョージ1世はエリザベスの曾孫であった。

アン女王の死は、ヘルレンハウゼン (Herrenhausen) のゲオルグ・ルードヴィッヒ (ジョージ・ルイス) に伝えられた。新王出迎えにドーゼット伯ライオネル・サックヴィル (Lionel Cranfield Sackville, 7th Earl of Dorset and 1st Duke of Dorset) (1688 年生-1765 年没) が到着し、ジョージにロンドン出発を要請したが、ジャコバイト (Jacobite) による暗殺計画を熟知していたジョージは、そのドーゼット伯の要請には即応しなかった。ジョージ王の到着が遅れると、ジャコバイトの反乱や政争が起こると予想した政府は、国会議員の新王に対する忠誠の誓いを取り付け、新王の宮廷費としては巨額の年 70 万ポンドを議決した。この議決をうけて、1714 年 9 月にジョージ 1 世の一行 100 人¹¹⁰ がグリニッジに入港した。国民は、ジョージ 1 世が個人的魅力の乏しい、詩的ではない、人付き合いの悪い、野戦向きのドイツ人という印象を抱いていた。ジョージ 1 世は、当時の貴族や政界の上層の人には異常な人物として映り、侮蔑と猜疑の眼で国民に迎えられた。

内政面では、ジョージ 1 世は、トーリー内閣を入れ替えて、1715 年の選挙で大勝した¹¹¹ ホイッグ内閣を発足させた。チャールズ・タウンゼンド (Charles Townshend) (1674 年生-1738 年没)、ジェイムズ・スタナップ (James Stanhope) (1673 年生-1721 年没)、サー・ロバート・ウォルポール (Sir Robert Walpole, Earl of Oxford) (1676 年生-1721 年没) を登用した。特に、ジョージ 1 世は、ウォルポールには全幅の信頼を置き政務を任せ、ウィリアム 3 世 (在位 1689 年-1703 年) 時に芽生えた責任内閣制をより強固なものへと発展させ、「君臨すれども統治せず」の実効が顕著になった。スペイン継承戦争¹¹² (1701 年-1714 年) では、ゲオルク・ルードヴィッヒ (ジョージ・ルイス) は、マールバラ公ジョン・チャーチル (John Churchill, 1st Duke of Marlborough) (1650 年生-1722 年没) のもとで勇敢に戦った。

対外政策では、ジャコバイトに対する対策が注目すべきものであった。1715 年にジャコバイト¹¹³ による反乱がおこった。第 22 あるいは第 11 代マー伯ジョン・アースキン¹¹⁴ (John Erskine,

¹¹⁰ 随行者が 100 人であったことも、英国人に悪い印象を与えた。英国が居心地の悪いところであれば、すぐに引き上げることをジョージは想定していたために、少人数にした。「洗濯女 1 人」しか連れてこない、英国人に揶揄された。

¹¹¹ この大勝の陰では、ユトレヒト条約でトーリーがイギリスの利益を優先させ、ドイツ諸邦やオランダを切り捨てる行為に出たことを通じてジョージ 1 世がトーリーを信用していなかったことも影響している。

¹¹² スペイン王カルロス 2 世 (Carlos II) (在位 1665 年-1700 年) が崩御し、その遺言でフランス王孫フィリップに王位を譲ることになっていた。フランス・ブルボン家のアンジュ公フィリップ (Philippe, Duke of Anjou) がスペイン王フェリッペ 5 世 (Felipe V) (在位 1700 年-1724 年) として即位した。これに対し、オーストリア、イギリス、オランダが対フランス大同盟を結び、フェリッペ 5 世の即位に反対し、フランス、スペインに宣戦布告した。これがスペイン継承戦争であった。

¹¹³ 1688 年の「無血革命」の後、半世紀にわたって政治を動揺させた反革命勢力で、ステュワート朝ジェイムズ 2 世とその正嫡をイングランド王位に復位させるために政治的・軍事的な行動を繰り返した人々をジャコバイトと呼んでいる。イングランドのジャコバイトには、トーリー党の人たちが多く、ホイッグ党のサー・ウォルポールは、「ジャコバイトは危険分子である」というキャンペーンを展開し、公然とジャコ

22ndあるいは11th Earl of Mar) (1675年生-1732年没)は、ジェイムズ・フランシス・エドワード・ステュワート¹¹⁵ (James Francis Edward Steward) (1688年生-1766年没) (ジェイムズ大僭称者) をカトリックから国教に改宗させ、彼をジェイムズ8世として迎えるために1715年に蜂起した。一時、スコットランドの大部分を制圧したが、その年の11月13日にスターリングの北ダンブレイン近くのシュリフミア (Sheriffmuir) の戦い、アーガイル軍 (John Campbell, 2nd Duke of Argyll)¹¹⁶ (在位1678年-1743年) (政府軍) を苦しめたが、兵站が底を尽き、鎮圧された。その年の12月にジェイムズ大僭称者は、スコットランドに上陸したが、すでに勝負の体勢は政府軍にあり、この蜂起は失敗に終わった。彼は、何もすることができずにフランスに戻った。ルイ14世 (在位1643年-1715年) の死後、ジョージ1世は、ルイ15世 (在位1715年-1774年) の摂政オレンジ公フィリップ (Phillippe II, Duke of Orléans) (1674年生-1723年没) との交渉でフランスのジャコバイトに対する支援を打ち切らせた。これは英国内のジャコバイトの動きを封じる上で効果があった。

アン女王時代にロバート・ハーリー (Robert Harley, 1st Duke of Oxford and Earl of

バイトを名乗ることを抑えた。スコットランドのジャコバイトの基盤は、ハイランド地方であった。

¹¹⁴ マー伯は、最初の創設 (1114年) から数えて22代目であるが、第2の創設 (1426年) から数えて11代目、1565年の創設から数えて7代目であった。彼は、イングランドとの連合を推進した人物であり、ウエストミンスターの上院議員で、大臣であった。最初、トーリーに属していたが、ジョージ1世を迎えるにあって、彼はホイッグに転向し、ジョージ1世に忠誠を誓約したが、他のトーリー議員と同様に国務大臣職は解かれた。1715年8月に彼は、大僭称者 James Edward (the Old Pretender) の信奉者の長に納まり、彼は1715年9月にスコットランド、イングランド、フランスおよびアイルランド王国ジェイムズ8世を宣告した。1715年11月に Sheriffmuir においてアーガイル公 (John Campbell, 2nd Duke of Argyll) と戦う。アーガイル公の軍隊よりも兵の数では増さっていたが、戦いは完全にマー伯の敗北であった。マー伯は1715年9月6日、イングランド北部でトマス・フォースターも拳兵したが、いずれも1715年11月までには政府軍によって鎮圧された。

¹¹⁵ ジェイムズ・フランシス・エドワード・ステュワートは、イングランド王ジェイムズ2世 (在位1685年-1688年) と王妃メアリー・オブ・モデナ (Mary of Modena) (1658年生-1718年没) の間に生まれた。誕生した時に無血革命がおり、王妃と共にセント・ジェイムズ宮殿から脱出してフランスに亡命した。ジェイムズは、カトリック教徒であったが、王位継承権が発生する国教徒に改宗した。ジェイムズ・フランシス・エドワード・ステュワートはマリア・クレメンティナと結婚し、チャールズ・エドワード・ルイ・カシミア・シルベスター・マリア・ステュワート (Charles Edward Louis Casimir Silvester Maria Stuart) (1720年生-1788年没) とヘンリー・ベネディクト (Henry Benedict) (1725年生-1807年没) の2人をもうけた。長男チャールズは、ローマ生まれで、小僭称 (若年王僭称) ボニー・プリンス・チャーリー (Bonnie Prince Charlie) の愛称で呼ばれ、スコットランドへ上陸し、王位回復を目指すか、1746年にスコットランド北部のカロドウン・ムアで敗北した。イングランド王位にステュアート王家の回復は達成されなかった。スコットランドのジェイムズ2世を支持するジャコバイト (Jacobite) はイングランドと対立した。

¹¹⁶ 彼は、1705年に連合法を支持し、グリーンウィッチ公 (1st Duke of Greenwich) が授けられた。彼は、スペイン継承戦争において英国軍隊の指揮官であった。1710年にガーター騎士団にされた。1711年にオクスフォード卿およびボリングブロッック卿のトーリー大臣によってスペインの英国軍司令官に任命された。

Mortimer) (1661 年生-1724 年没) が設立した南海会社を巡る投機事件が南海泡沫事件 (South Sea Bubble) であり、この事件は 1721 年に終息した。この事件の責任をとって、サンダーランド伯チャールズ・スペンサー (Charles Spencer, 3rd Earl of Sunderland) (1675 年生-1722 年没) は、第 1 大蔵卿を辞任せざるを得なかった。代わってウォルポールが政権の座に着いた。サンダーランド伯は、復権を狙ってその後ろ盾としてステュワート家やジャコバイトを選び、1722 年にジャコバイトのクーデター事件であるアタベリ陰謀事件が起こった。これは、南海泡沫事件によって信望を失った元第 1 大蔵卿サンダーランド、ロチェスター司教フランシス・アタベリ (Francis Atterbury, Bishop of Rochester) (1662 年生-1732 年没) らが中心になった事件であったが、この事件はその計画段階で潰された。これによってウォルポールのホイッグの優勢が確定し、トーリーは表だってステュワート王家を支持することを控えるようになった。

この事件を受けて、グレートブリテン王国で最大の「魔女狩り」(大規模なジャコバイト狩り) が行われた。フランシス・アタベリら高位の中心人物は国外追放とされ、カトリックには重い税が課された。この事件以後、トーリーはジャコバイトと見なされ、議会内でのホイッグ対トーリーの対立構図は徐々に薄れ、代わって宮廷と地方という対立構図が徐々に増していった。

1688 年にジョージ 1 世¹¹⁷ は従姉妹のブラウンシュヴァイク＝リュネブルク公女ゾフィア・ドロテア (Sophia Dorothea) (1666 年生-1726 年没)¹¹⁸ と結婚し、2 人の間にジョージ (後のジョージ 2 世) とゾフィア・ドロテア¹¹⁹ (1688 年生-1705 年没) が生まれた。ジョージ 2 世 (George II) (在位 1727 年-1760 年) は、1705 年にブルデンブルク・アンズバッハ辺境伯 (ブランデンブルク・アンズパーク侯) ヨハン・フリードリッヒの娘キャロライン (Carolina Wilhelmina Dorothea) (1683 年生-1737 年没) と結婚し、彼女はハノーヴァー選帝侯太子ジョージ・オーガスト (Georg August) 妃となった。1714 年に彼女は、皇太子妃としてイングランド (グレートブリテン) 王国に渡り、セント・ジェイムズ宮殿に住んだ。ウォルポールはジョー

¹¹⁷ ジョージ 1 世の母ゾフィアは、ファルツ選帝侯フリードリヒ 5 世とその妃エリザベスの娘あり、エリザベスの父であるイングランド王ジェイムズ 1 世を通じてステュワート家に繋がる。

¹¹⁸ 彼女は、母親 (エレオノーレ) 譲りの美人であった。しかし、ジョージは美女ゾフィアに関心を示さず、醜女と思われる女に手を出していた。イングランドに帯同した 2 人の愛人も不美人であった。ジョージには美人コンプレックスが会ったのかも知れない。スウェーデン人のケニヒスマルク伯爵フィリップ (Count Philip von Königsmark) と情を通じたことを知ったジョージは、1694 年にゾフィアを離縁し、アールデン城に彼女を幽閉した。ゾフィアは、以後 32 年間その城に幽閉され、1726 年に不幸な一生をその城で終えた。この幽閉死させたことに、息子のジョージ (後のジョージ 2 世) は怒り、父ジョージを生憎んだと言われている。

¹¹⁹ プロイセン王フリードリヒ 1 世 (Friedrich I) (在位 1701 年-1713 年) の王妃になった。2 人の間に生まれたのがフリードリヒ大王 (Friedrich der Gross) (在位 1740-1787) であった。

ジ2世への根回し役ならびに操縦役としてキャロライン王妃を選んだ。キャロラインは、公事あるいは私事であろうと、全てについてウォルポールに相談し、英語を話さないジョージ2世に替わって、重要政務の根回しを行った。1737年のキャロラインの死は、ウォルポールにとっては掛け替えのない協働者の死であった。ジョージ2世は、内政を第1大蔵卿ウォルポールに任せ、音楽、軍服、大陸における軍事に関心を持っていた。

好戦的な性格であったジョージ2世は、グレートブリテン王国を大陸の戦争に巻き込む恐れがあった。それでも王妃キャロラインの存命中には何事も無かったが、彼女の死後、グレートブリテン王国とスペイン王国との間に海上権争奪戦の「ジェンキンスの耳の戦争」¹²⁰ (War of Jenkins' Ear) (1739年)が勃発した。これによってグレートブリテン王国に長い間続いた「ウォルポールの平和」も終焉することになった。この海戦に続いて、オーストリアのマリア・テレージアの大公即位にフランスが反対したことに端を発した「オーストリア継承戦争」(1740年-1748年)にジョージ2世は参戦した。この継承戦争で、オーストリアを支援したグレートブリテンやオランダなどと、フランスを支援したプロシア、スペインやバイエルンなどとの間で、国々による領土拡張戦が繰り広げられた。

3.3 45年のジャコバイト

1742年にウォルポール内閣が辞任し、1745年にウォルポールが死亡した。1745年7月にフランス王ルイ14世の助けを得て、小僭称者チャールズ・エドワード・ルイ・カシミア (Charles Edward Louis Casimir), あるいはボニー・プリンス・チャーリー (Bonnie Prince Charlie) (1720年生-1788年没)が、フランスのフリーゲート艦で密かにスコットランド西岸のモイダイト北の入江のロッホ・ナン・ユアムに上陸した。従者7人を引き連れての隠密の上陸であった。インヴァネスのグレンフィナンで軍旗を上げ、ハノーヴァー王家打倒の小軍勢は、ハイランダーであったロッヒールのドナルド・キャメロン (Donald Cameron of Lochiel) (1700年生-1748年没)¹²¹ やケポッホのマクドナルド (Clan MacDonald) などの氏族の族長

¹²⁰ グレートブリテンの南海会社は、スペイン領西インド諸島と貿易を許されていた。スペインは、グレートブリテンの貿易の利益を申告せず、また密貿易も行っているとして、沿岸警備隊を使って商船を拿捕した。レベッカ号船長ジェンキンスが拿捕され、耳が切り落とされた。その耳が庶民院に証拠として提供され、スペイン報復論が広がった。1739年10月、スペインに宣戦布告した。この戦争はヨーロッパ大陸のオーストリア継承戦争に引き継がれた。

¹²¹ 1715年の第1次ジャコバイトの反乱の後に部族長になった。彼の父は、第1次ジャコバイト運動の中心人物であったが、フランスに逃亡してしまった。その後、彼は部族長になった。高地地方(ハイランド地方)では、歴史的に、勇敢で何事にも恐れない人物に価値が置かれてきた。牛を主な資産とし、派手な装飾品を使い、吟遊詩人が部族の英雄的行動を賞賛する饗宴に多くの時間を費やす習慣が高地地方にはあった。このような習慣は低地地方では何世代も前から廃れていた。また部族の酋長はアイオナ法規のような法令を避けてエディンバラで生活するようになった。彼らには極端な身分意識があったので、彼ら部族長

を加えて、1,000人の兵力になり、前進し、9月にはパースを占領し、その下旬にはエディンバラを支配し、父ジェームズ（ジェームズ・フランシス・エドワード）をグレートブリテン王国およびアイルランド王ジェームズ8世と宣言した。次に、南進した軍勢がイングランド北部カーライルに達したとき、その兵力は2,500人から5,000人の規模に達していた。その勢力を加速した軍勢は、11月9日には、カーライルを占領した。12月4日にロンドン北200キロのダービーに達した。しかし、南進は此処までであった。

チャーリー軍は、兵站を考えずに南進したために、食料などの後援物資が底を尽き、長く伸びきった軍勢をロウランドの司令官ジョージ・ウェイド（George Wade）（1673年生-1748年没）の軍勢に断ち切れ、またジョージ2世の次男（あるいは3男）カンバーランド公ウィリアム（William Augustus, Duke of Cumberland）（1721年生-1765年没）の指揮する1万の軍勢の北進によって、チャールズ軍は、12月6日に北を目指して退却した。チャールズ軍は、敗戦の連続で、遂に北部インヴァネスの東方カロドウン・ミュアに追いつめられた。チャールズ軍の最後の兵力は1746年4月に悲惨な結末を迎えた。カンバーランド公の掃討作戦は徹底していたため、負傷者まで全てを殺戮し、血も涙も無いやり方¹²²であった。チャールズは、女性フローラ・マクドナルド（Flora MacDonald）（1722年生-1790年没）¹²³の助力を得て、

達は、フランス風の着物、精巧な家具、輸入家具、洗練されたワイン、上品な衣装を購入し、その氣勢を抑えていた。ハイランド地方は、ヨーロッパにおいて最も所得水準の低い地域であったので、部族長達はその部族の土地から所得を得ることを目指した。

3代アーガイル伯（Archibald Campbell, 3rd Duke of Argyll）（1682年生-1761年没）は、土地を血縁関係のある土地保有者よりも最も高い指し値を付けた者に貸し出されるという布告を出した。これによって旧来の土地保有者はその土地から殴打された。アーガイルは、戦争時に密集突撃隊として働き、士官のように行動する借地者を集めた。土地保有者との伝統的な結合を破棄することによって、アーガイル部族は軍事的に弱体化した。それに対し、15年のジャコバイト運動で多額の賠償で損害を被り、ロッチール（Lochiel）は、土地保有者との間で伝統的な取り決めの多くを低地の規範に変容させたが、ハノーヴァー王家に忠誠したキャンベル部族などのような方法で繁栄することはなかった。Lochielは、ジャコバイト部族がフランスに上陸するときには立ち上がることを宣言した。政府はLochielがフランスのチャーリー・ステュワートとコミュニケートしていることを知って、1745年、彼を指名手配した。主だった部族は、フランスの後ろ盾がないときに立ち上がることはなかった。実際、フランスはスコットランドのジャコバイト部族が先に立ち上がることを望んだ。

¹²² カンバーランド公ウィリアムに「屠殺者」の渾名がつけられた。

¹²³ 彼女は実践的なプロテスタントであった。カロドウンの戦いで敗れ、ポニー・プリンスが敗走するとき、彼女は外ヘブリーズ諸島の Benbecula 島に住んでいた。その島は、ハノーヴァー政府によって制圧されていた。彼女は、ポニー・プリンスが打ち負かされたならば、あるいは遭難したならば、善意から彼を助けるであろう、とカンバーランド卿やスコットランド軍の総司令官に告げた。マクドナルド部族もポニー・チャーリーに好感を持っていたので、スカイ島地域の警備を担っていた軍の司令官がフローラの継父（ヒュー・マクドナルド）であった。その司令官は、彼女の団に大陸への通行証を発行した。チャーリーは、糸紡ぎのアイランド女 Betty Burke に変装した。彼女たちはチャーリーをボートでスコットランドを脱出させた。ボートの乗組員の密告によって嫌疑を賭けられ、逮捕され、ロンドンに連れて行かれ、ロ

ヘブリディーズ諸島を逃げ回って、単身でフランスに戻った。

この戦闘は、ハイランダーに大きな後遺症をもたらした。家の焼き払い、氏族名の使用禁止、タータンとキルトの着用の禁止、いかなる武器の携帯の禁止などの強制がハイランダーに課された。これ以降、ステュワート王朝再興を求める反乱は起こらなかった¹²⁴。

ジャコバイト運動は、一方では、スコットランドの王制への拘りの問題であるが、他方では、グレートブリテン王国、スペイン王国、フランス王国、神聖ローマ帝国、さらにプロイセン王国の間の問題であり、ブルボン家、ハプスブルグ家、そしてステュワート家やハノーヴァー家の王家間の利害関係にも着目すべき問題である。

むすびにかえて

スコットランドでは、国王が不在あるいは幼少故に、貴族を摂政役として王制の維持に務めたと思われる。これは、スコットランドにおける1つの国民性であると思われる。スコットランドでは、主権を国王に求め、貴族はそれを支える役回りであった。またスコットランドでは、政治制度として、貴族中心の共和制でさえ一度も採用されていないことも事実である。なぜ王制に拘ったのか。それは多分にスコットランド国民の特質であるといえるのではないだろうか。この観点から18世紀までのスコットランドの歴史を振り返る限り、スコットランド議会の停止を受け入れ、連合国をイングランドと組んだが、しかし、スコットランドは王制の廃止（立憲君主制）を受け入れたことは一度もないのも事実である。むしろ積極的に王制あるいは立憲君主制に拘ったように思われる。

「連合法」（1707年）以降でも、スコットランドでは、共和制よりも王制（あるいは立憲君主制）が好まれているのかも知れない。大英連邦制（Common Wealth）を通じて、世界に進出していったスコットランドではあったが、20世紀70年代になると、大英帝国あるいは大英連邦の経済力が陰り、90年代にEU連合が確立すると、スコットランドには大英帝国あるいは英国連邦から離れる力が育ってきているように思われる。

21世紀の今日、スコットランドが「グレートブリテン」から分離独立をするとしたならば、共和制ではなく、国王を象徴的に設ける政治体制を選択するのではないかと予測される。

ンドン塔に短期間拘置された。賠償法が通過したので、1747年に解放された。

¹²⁴ 1808年にチャールズ（愛称ポニー・プリンス・チャーリー）の弟の枢密卿ヘンリー・ベネディクト（1725年生-1807年没）が他界し、ステュワート王家の直系は断絶した。

参考文献

- デイヴィッド・アーミテイジ 著 (平田・岩井・大西・井藤 共訳)『帝国の誕生』日本経済評論社 2005年6月
- マックス・ウェーバー 著 (大塚 久雄 訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989年1月
- マックス・ウェーバー 著 (阿閉 吉男・脇 圭平 共訳)『官僚制』角川文庫 1971年8月
- マックス・ウェーバー 著 (脇 圭平 訳)『職業としての政治』岩波文庫 1980年3月
- 梶田 孝道 著『統合と分裂のヨーロッパ』岩波新書 1993年11月
- 川畑 洋一 編著『現代世界とイギリス帝国』ミネルヴァ書房 2007年6月
- 北 政巳 著『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』藤原書店 2003年3月
- ジョン・キャンベル著 (坂本 賢三 著)『中世の産業革命』岩波書店 1978年12月
- エドモンド・キング著 (吉武 憲司 監訳)『中世のイギリス』慶応義塾大学出版 2006年11月
- リンダー・コリー著 (川北 稔 監訳)『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会 2000年9月
- バルーチ・スピノザ 著 (畠中 尚志 訳)『国家論』岩波文庫 1971年9月
- 塩川 伸明 著『民族とネイション』岩波新書 2008年11月
- スマウト, T, C. (木村 正俊 監訳)『スコットランド国民の歴史』原書房 2010年11月
- アダム・スミス 著 (大内 兵衛・松川 七郎 共訳)『諸国民の富』(四) 岩波文庫 1992年4月
- 増田 史郎 著『ヨーロッパとは何か』岩波新書 1967年7月
- ヨーハン・ホイジンガ (堀越 孝一 訳)『中世の秋 (上) (下)』中公文庫 1984年4月
- エドウィン・ミュア 著 (橋本 楨矩 訳)『スコットランド紀行』岩波文庫 2007年
- A.L. モートン (鈴木亮・荒川 邦彦・浜林 政夫 訳)『イングランド人民の歴史』未来社 1976年
- 森 護 著『スコットランド王国史話』大修館書店 1996年12月
- 森 護 著『英国王室史話』大修館書店 1988年7月
- ジェフロード・デランティ 著 (山之内 靖・伊藤 茂 共訳)『コミュニティ』 NNT出版 2007年4月
- ジグムント・バウマン 著 (奥井 智之 訳)『コミュニティ』筑摩書房 2008年1月
- David Ross, *Scotland: History of A Nation*, Lomond Books 1998年
- ジョン・ロック 著 (鶴飼 信成 訳)『市民政府論』岩波文庫 1971年1月
- (くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論専攻)